

IBM® DB2 Universal Database™



リリース情報

バージョン 8.1 フィックスパック 5

IBM® DB2 Universal Database™



リリース情報

バージョン 8.1 フィックスパック 5

目次

リリース情報について	vii	DB2 Universal Database バージョン 7 サー バー・アクセス	18
バージョン 8.1 フィックスパック 5 の新機能 1		データウェアハウス・センターの中国語 (簡体字) 非サポート	18
5 デベロップメント・センターの機能強化	1	DB2 Web ツール	18
5 DB2 for z/OS で実行される SQL ストアー ド・プロシーチャーのリモート・デバッグの サポート	1 2	DB2 UDB for OS/390 バージョン 6 およ び DB2 UDB for z/OS バージョン 7 での SQLJ および SQL アシストのサポートに 必要なデベロップメント・センター APAR .	18
5 DB2Build パッチ・ユーティリティーを使用 して、リモート DB2 for z/OS サーバー上の SQL ストアード・プロシーチャーをビルド 可能	1 2	64 ビット・オペレーティング・システムで のデベロップメント・センターの制約事項 .	19
5 DB2 Connect の機能強化	3	デベロップメント・センターが OS/390 ま たは z/OS サーバー上で実行される SQL ステートメントの実コスト情報をサポート .	19
5 DB2 Connect on Linux for zSeries (64 ビッ ト)	3	Linux オペレーティング・システム上のデ ベロップメント・センター	20
5 OLAP センターの機能強化	3	フェデレーテッド・システムの制約事項 .	20
5 DB2 Cube Views の Windows 2003 Server (32 ビット) サポート	3	DB2 Universal Database Workgroup Server Edition に組み込まれた高可用性機能	22
5 クエリー・パトローラー・センターの機能強化 拡張されたフィルター操作機能	3	HP-UX JDBC ドライバー制約事項	22
5 アプリケーション開発の機能強化	6	Microsoft Visual Studio .NET 用の DB2 Development Add-In	23
5 ルーチンの呼び出しにはルーチンに対する EXECUTE 特権が必要	6	Linux で必要な IBM Developer Kit for Java 1.3.1 (x86、32 ビット)	23
5 管理の容易性の向上	10	AIX でのインストール	24
5 DB2 バインディング・プロセスのためのポ リシー定義	10	AIX オペレーティング・システムでの中国 語 (簡体字) ロケール	24
5 AIX における接続ユーザーのログイン制限 の制御	11	Linux でのインストール	25
		Red Hat オペレーティング・システムでの 中国語 (簡体字) ロケール	25
既知の問題と対処方法 (バージョン 8.1 フィ ックスパック 5)	13	アジア言語のフォントの可用性 (Linux)	26
製品および製品レベルのサポート	13	ライセンス・センターのバックレベル・バ ージョンの非サポート	27
3 Linux および UNIX ベースのシステムにお ける代替フィックスパック	13	Microsoft Visual Studio、Visual C++	28
3 バックレベル DB2 Universal Database サー バーのサポート	14	Merant Driver Manager の非互換性 (UNIX) .	28
クラシック・コネクトは使用不可	16	64 ビット・オペレーティング・システムで 必要な Microsoft XP のフィックス	30
データウェアハウス・センターの下位レベ ル・サーバーのサポート制限	16	MVS オペレーティング・システムの非サ ポート	30
4 HP-UX on IA64 のデータベース移行	17	バージョン 8 における SNA サポート制限 .	30
DB2 Universal Database Workgroup Server Edition 用の DB2 ライセンス・ポリシー	17		

4	サポートされている LDAP クライアントおよびサーバーの構成	31	4	Visual Warehouse 5.2 DB2 プログラム「DB2 UDB EEE へのフラット・ファイルの VW 5.2 ロード (AIX のみ)」はサポートされていない	41
4	Linux (AMD64) 用の Tivoli Storage Manager	32	4	CURSOR ロードの限定的なサポート	42
5	Linux (AMD64) でのツール・カタログ・データベース作成の非サポート	32	4	DB2 Cube Views	42
5	AIX、Solaris、および HP-UX でのツール・カタログ・データベース作成の非サポート	32	4	Cube Views サンプル・アプリケーションはサンプル・ソースと異なっている	42
5	Windows XP オペレーティング・システム Workgroup Server 64 ビット・インスタンス制約事項	33	4	DB2 Data Links Manager	42
5	アプリケーション開発	33	4	データ・リンク・サーバーのバックアップは、Tivoli Storage Manager アーカイブ・サーバー (AIX、Solaris オペレーティング環境) を使用しない	42
5	AIX 4.3.3 および AIX 5.1 以降用の DB2 には AIX C++ バージョン 6 のランタイムが必要	33	4	DB2 Universal Database のバックアップとリストア	43
5	CLI の非同期実行	34	4	Linux 390 オペレーティング・システム上のバックアップおよびリストア	43
2	Windows 64 ビット・オペレーティング・システム上の CLI および ODBC	34	4	デベロッパー・センター	44
5	SQL ルーチン・コンパイル・コマンド 用 DB2 パス (Windows)	34	4	二重引用符で囲まれたストアード・プロシージャのデバッグ	44
5	Linux 上の Java 共用ライブラリーへのアクセス	34	4	SQLFLAG(STD) プリコンパイラー・オプション・エラー	44
5	構成アシスタント	35	4	ドキュメンテーション	44
5	サポートされない BIND オプション	35	4	DB2 レプリケーションのガイドおよびリファレンスのドキュメンテーション	44
5	構成パラメーター	36	4	DB2 Universal Database バージョン 8 HTML ドキュメンテーション・インストールの制約事項 (Windows)	44
2	複数パーティション・データベースにおける NUM_LOG_SPAN 構成パラメーター	36	1	ドキュメンテーションの全カテゴリーをインストールしていない場合の AIX におけるドキュメンテーション検索の障害	45
2	コマンド・センター	36	1	Java 2 JRE1.4.0 でのドキュメンテーション検索の問題	45
5	コマンド・センターおよびバージョン 7 サーバー	36	1	インストール時のオプションにない言語での DB2 インフォメーション・センターのインストール	45
5	複数のフィックスバック環境での dasdrop の制約事項	37	1	ホスト・システムでの使用時の DB2 Universal Database for Linux の正式名称	46
5	データウェアハウス・センター	38	1	GUI ツール	46
5	ERwin 4.x メタデータ・ブリッジ	38	1	コントロール・センターのプラグインのサポート	46
5	リモート・オブジェクトの日本語名	38	1	DB2 GUI ツールでのインド語文字の表示	47
5	Clean Data トランスフォーマーの制約事項	38	1	Linux オペレーティング・システムが稼働する zSeries サーバーでの GUI ツールの非サポート	48
5	レプリケーション用のウェアハウス・エージェントの使用および Client Connect ウェアハウス・ソースへのアクセス	39			
5	インターバルを設けられたウェアハウス・プロセスの実行のスケジューリング	40			
5	iSeries システムでのレプリケーション・センターの制約事項	40			
3	インポートとエクスポートの制限	40			

列のロードおよびインポート・ページでの IXF ファイル内の DBCS 文字の非サポート	48	コマンド・センターの無効な SQL アシスト・ボタン	59
ロード操作の失敗時の誤った標識の表示	48	DB2 から起動される 2 つのバージョンの SQL アシスト	59
GUI ツールの最低限の表示設定	48	SQL リファレンス	59
AIX での GUI ツール使用時の SQL1224N エラー	48	ALTER WRAPPER ステートメント	59
ヘルス・モニター	49	システム・モニター	59
デフォルトでのヘルス・モニターのオフ	49	イベント・レコード・サイズの制限	59
ヘルス・インディケータの制約事項	49	スナップショット UDF の制限	59
インフォメーション・カタログ・センター	49	V8.1.4 で定義されていないリカバリー・モニター・エレメントで再実行されるログの量	60
インフォメーション・カタログ表のパーティション化禁止	49	スロットル・ユーティリティの制約事項	60
タグ言語ファイルのインポート時にログ・ファイルが生成されない	49	XML Extender	60
メッセージの解説	50	XML Extender の名前変更されたサンプル・プログラム	60
バージョン 8.1.4 インフォメーション・センター・メッセージ・トピック	50	非固有属性およびエレメント名を含む XML Extender 内の文書の分解	62
ADM メッセージの更新情報	51	追加情報	64
SQL メッセージの追加	51	Unicode サーバー動作の変更	64
DBI メッセージの更新情報	51	SQLException.getMessage() 使用時に全メッセージ・テキストが戻されない	64
移行	54	Linux、UNIX および Windows オペレーティング・システムでの Java 関数およびルーチン	65
DataJoiner またはレプリケーション使用時の DB2 Universal Database の移行	54	翻訳版の MDAC ファイルが最初にインストールされていない場合に DB2 Universal Database V8.1 のすべての各国語版で使用される英語の Microsoft Data Access Components (MDAC) ファイル	65
DB2 バージョン 8 の Windows 32 ビットのデータベースと Windows 64 ビットの移行	54	オンライン・ヘルプの修正および更新	67
Query Patroller	55	デベロップメント・センターにおける SQL スタード・プロシージャの C 環境の構成	67
DYN_QUERY_MGMT 無効時の制約事項	55	Hummingbird Exceed を使ったデベロップメント・センターへのアクセス時のビュー連結の使用可能化	67
結果表による DB2QPRT スキーマの使用	55	デベロップメント・センターのヘルプにおける Microsoft Visual Studio .NET アドインの情報	68
Historical Data Generator 実行前の Explain 表の作成	56	バージョン 8.1.2 への DB2 XML Extender の移行	69
履歴分析用のログ・ファイルの検査	56	Java ルーチンをデベロップメント・センターでコンパイル可能にするパスの設定	69
レプリケーション	56	Runstats ダイアログ - 更新された到達情報	69
DB2 データ・レプリケーション用の Java 管理 API ドキュメンテーション	56		
列マッピングの制約事項およびレプリケーション・センター	56		
Informix ソースのレプリケーション	56		
Update-anywhere シナリオに LOB 列を組み込む際の制限の解除	57		
Windows の保護環境	57		
Spatial Extender	58		
フィックスパックまたはパッチのインストール後の再バインド	58		
SQL アシスト	59		

デベロップメント・センターにおける Java ス
トアード・プロシージャのビルド・オブシ
ョンの指定 69

付録 A. CD-ROM のディレクトリー構造 . . 71

付録 B. 特記事項 73
商標. 76

リリース情報について

内容:

リリース情報には、以下の DB2® バージョン 8 の製品についての情報が記載されています。

DB2 Universal Database™ Personal Edition
DB2 Universal Database Workgroup Server Edition
DB2 Universal Database Workgroup Server Unlimited Edition
DB2 Universal Database Enterprise Server Edition
DB2 Personal Developer's Edition
DB2 Universal Developer's Edition
DB2 Warehouse Manager
DB2 Warehouse Manager Sourcing Agent for z/OS™
DB2 Data Links Manager
DB2 Net Search Extender
DB2 Spatial Extender
DB2 Intelligent Miner™ Scoring
DB2 Intelligent Miner Modeling
DB2 Intelligent Miner Visualization
DB2 Connect™ Application Server Edition
DB2 Connect Enterprise Edition
DB2 Connect Personal Edition
DB2 Connect Unlimited Edition
DB2 Query Patroller

構造:

- 3 このリリース情報は、3 つの部分に分かれています。
- 3
- 3 • 最初の部分では、本リリースの新機能に重点が置かれています。
 - 3 • 第 2 の部分では、上記バージョンの製品に影響を与える問題、制約事項、および対
 - 3 処法が、このリリース情報の発行時点で判明している範囲で詳述されています。これ
 - 3 らの情報をお読みになり、本リリースの DB2 製品ファミリーの現存する既知の問題
 - 3 についての理解を深めてください。
 - 3 • 最後の部分には、製品の GUI ツールのヘルプにある情報の修正と更新が記載されて
 - 3 います。

1 最新のドキュメンテーションは、ブラウザーでアクセスする DB2 インフォメーショ

1 ン・センターの最新バージョンに掲載されています。最新のドキュメンテーションをダ

1 ウンロードする URL は、以下の『追加リソース』セクションに記載されています。

1 DB2 インフォメーション・センターのドキュメンテーションに入っている改訂マーク

1 は、バージョン 8.1 の PDF 情報が最初に掲載された後に追加または変更されたテキス

1 トであることを示しています。縦線 (|) は、バージョン 8.1 が最初にリリースされたと

1 きに追加された情報であることを示しています。数字標識の 1 や 2 は、フィックスパ
1 ックまたはこれと同じ番号で終わるレベルで追加された情報であることを示していま
1 す。例えば 1 は、フィックスパック 1 で追加または変更された情報を示し、2 は、バ
1 ージョン 8.1.2 で変更された情報であることを示します。

1 フィックスパック 1 の時点で、PDF フォームの「*Data Links Manager* 管理ガイドおよ
1 びリファレンス (SC88-9169-01)」が更新されましたが、これは以下の DB2 サポート・
1 サイトからダウンロードできます。

1 <http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>

追加リソース:

DB2 Life Science Data Connect 製品の資料は、次の IBM ソフトウェア・サイトからダ
ウンロードできます。

<http://www.ibm.com/software/data/db2/lifesciencesdataconnect/>

DB2 ドキュメンテーションを HTML 形式で参照するには、
<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> からオンラインの DB2 HTML インフォ
メーション・センターにアクセスしてください。また、DB2 HTML インフォメーショ
ン・センターをご使用のシステムにインストールするには、「*DB2 HTML
Documentation*」の CD-ROM イメージを使用して上記サイトからダウンロードできま
す。各リリースで、DB2 HTML ドキュメンテーションは更新されます。最新のドキュ
メンテーションについては、オンラインの DB2 HTML インフォメーション・センター
にアクセスするか、「*DB2 HTML Documentation*」の CD-ROM イメージをダウンロー
ドしてシステムにインストールしてください。PDF ドキュメンテーションは、頻繁に
は更新されていません。

DB2 デベロップメント・センターと DB2 for z/OS の詳細については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/os390/spb/> に記載されています。

DB2 ファミリー製品の最新情報については、購読無料の *DB2 Magazine* を参照してく
ださい。このマガジンのオンライン版は、<http://www.db2mag.com> から入手できます。こ
のサイトに、購読方法に関する説明もあります。

バージョン 8.1 フィックスバック 5 の新機能

5 デベロップメント・センターの機能強化

5 DB2 for z/OS で実行される SQL ストアド・プロシージャのリモート・デバッグのサポート

5 DB2 UDB バージョン 8 フィックスバック 2 では、デベロップメント・センターは、
5 DB2 for z/OS V8 サーバー上で実行される SQL ストアド・プロシージャのリモート・
5 デバッグをサポートします。統合 SQL デバッガーにより、以下を実行できます。

- 5 • コードのステップスルー・デバッグ
- 5 • 行または変数のブレークポイントの設定
- 5 • 変数値の表示
- 5 • 変数値の変更
- 5 • スタック呼び出し情報の表示
- 5 • 呼び出しスタック上の別のネスト SQL ストアド・プロシージャとの切り替え

5 詳細については、次の技術文書を参照してください。

5 <http://www7b.software.ibm.com/dmdd/library/techarticle/0303rader/0303rader.html>

5 DB2Build バッチ・ユーティリティを使用して、リモート DB2 for z/OS サーバー上の SQL ストアド・プロシージャをビルド可能

5 新規 DB2Build バッチ・ユーティリティを使用すると、デベロップメント・センタ
5 ー・インターフェース提供のものと同じインフラストラクチャーを使用して、コマンド
5 行からリモート DB2 for z/OS サーバー上の SQL ストアド・プロシージャをビル
5 ドできます。DB2Build は、DSNTPSMP ビルド機能を使用してリモート・システム上
5 でビルド・ステップを実行し、結果を呼び出し側のクライアントにレポートします。

5 前提条件:

5 DB2Build バッチ・ユーティリティには以下が必要です。

- 5 • JDK バージョン 1.3 以上
- 5 • DSNTPSMP
 - 5 – DB2 z/OS バージョン 6 および 7 ではバージョン 1.15 (PQ45854) 以上
 - 5 – DB2 z/OS バージョン 8 ではバージョン 1.20 以上

- 5 • IBM DB2 Universal Database デベロップメント・センター、バージョン 8.1.2 (クラ
5 イアント)
- 5 • DB2 のインストール・パスが DB2PATH 環境変数内で参照されていること

5 サポートされるアクション:

5 **DROP** 既存のストアード・プロシージャをドロップするには、次のコマンドを発行
5 します。

5 DB2Build -action = drop [other options] name1 name2 name3

5 このコマンドは、定義済みのプロシージャ (name1) またはプロシージャの
5 セットをドロップします。他のオプションおよび対応する値のタイプの完全な
5 リストを確認するには、コマンド行から DB2Build -help と入力します。

5 **CREATE**

5 ストアード・プロシージャを作成するには、次のコマンドを発行します。

5 DB2Build -action = create [other options] filename1 filename2 filename3

5 このコマンドは、ソースから、filename に指定した名前でもストアード・プロシ
5 ージャをビルドします。ソースを含む各ファイルを使用して、1 つ以上のス
5 トアード・プロシージャに対してソース・ファイルのリストを指定すること
5 ともできます。このビルド・コマンドは、既存のストアード・プロシージャに
5 対して使用できます。また、新規ストアード・プロシージャの作成にも使用
5 できます。-force=true と設定した場合で、すでにストアード・プロシージャ
5 が存在していた場合、それはドロップされ、定義したストアード・プロシ
5 ージャが作成されます。-force=false と設定した場合、ストアード・プロシ
5 ージャが作成されるのは既存のものが存在しない場合のみです。他のオプシ
5 ョンおよび対応する値のタイプの完全なリストを確認するには、コマンド行か
5 ら DB2Build -help と入力します。

5 **REBIND**

5 既存のプロシージャのパッケージを再バインドするには、次のコマンドを発
5 行します。

5 DB2Build -action = rebind [other options] filename1 filename2 filename3

5 このコマンドは、新規バインド・オプションのセットを使用して、既存のス
5 トアード・プロシージャを再バインドします。他のオプションおよび対応する
5 値のタイプの完全なリストを確認するには、コマンド行から DB2Build -help
5 と入力します。

5 **ALTER_SOURCE**

5 ストアード・プロシージャのソースのみを再ビルドするには、次のコマンド
5 を発行します。

5 DB2Build -action = alter_source [other options] file1 file2 file3

- 5 • 状況
- 5 • サブミッター ID
- 5 • 作成時刻
- 5 • 完了時刻
- 5 • 照会の照会クラス

5 「照会アクティビティーの経過 (Query Activity Over Time)」レポートでは、以下をフィルタ操作できます。

- 5 • 照会 ID
- 5 • サブミッター ID
- 5 • 実行状況の説明

5 **注:**

- 5 1. (「照会アクティビティーの経過 (Query Activity Over Time)」など) すべての「履歴分析 (Historical Analysis)」レポートでは、履歴オブジェクトを選択するときにクエリー・パトローラー・センターの最上部に表示される時間範囲フィールドを使用することにより、完了時刻をフィルタ操作することも可能です。

5 「管理される照会 (Managed Queries)」フォルダーで「フィルター (Filter)」ノートブックをオープンするには、以下のようになります。

- 5 1. クエリー・パトローラー・センターをオープンします。
- 5 2. 「モニター (Monitoring)」フォルダーのオブジェクト・ツリーを、「管理される照会 (Managed Queries)」フォルダーを見つけるまで展開します。
- 5 3. 「管理される照会 (Managed Queries)」フォルダーを右クリックして、ポップアップ・メニューから「フィルター (Filter)」を選択します。「フィルター (Filter)」ノートブックがオープンします。

5 「照会 (Queries)」フォルダーで「フィルター (Filter)」ノートブックをオープンするには、以下のようになります。

- 5 1. クエリー・パトローラー・センターをオープンします。
- 5 2. 「履歴分析 (Historical Analysis)」フォルダーのオブジェクト・ツリーを、「照会 (Queries)」フォルダーを見つけるまで展開します。
- 5 3. 「照会 (Queries)」フォルダーを右クリックして、ポップアップ・メニューから「フィルター (Filter)」を選択します。「フィルター (Filter)」ノートブックがオープンします。

5 以下の両方の条件が満たされる場合、「管理される照会 (Managed Queries)」または「照会 (Queries)」フォルダーが選択されると、「フィルター (Filter)」ノートブックも自動的にオープンします。

- 5 • フォルダー内のオブジェクト数が、「フィルター (Filter)」ノートブックで指定したオブジェクト・カウントを超過する。

- 「フィルター (Filter)」ノートブックの「オブジェクト・カウントを超過したら自動的にフィルターを表示する (Automatically display filter when object count is exceeded)」オプションが使用可能になる。

手順: 履歴分析のために表をフィルター操作するときの手順は、「DB2 Query Patroller: インストール、管理、使用法のガイド」で説明されています。

次の表は、「管理される照会 (Managed Queries)」の「フィルター (Filter)」ダイアログにリストされる列ごとに、予想される値を示しています。

表 1. 「フィルター (Filter)」ダイアログ (「管理される照会 (Managed Queries)」) の有効な値

列	値
ID	照会 ID を表す数値
状況	状況を表す単一の文字。可能な値は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • H (状況が Held の照会) • Q (状況が Queued の照会) • R (状況が Running の照会) • A (状況が Aborted の照会) • C (状況が Cancelled の照会) • D (状況が Done の照会) • U (状況が Unknown の照会)
サブミッター ID	サブミッターの ID を表す文字ストリング
作成	照会が作成された時刻を表すタイム・スタンプ。例えば、次のようになります。 2003-07-29-00.00.00
完了	照会が完了した時刻を表すタイム・スタンプ。例えば、次のようになります。 2003-07-29-00.00.00
照会クラス	この照会で使用される照会クラスの ID を表す数値。

次の表は、「履歴照会 (Historical Queries)」の「フィルター (Filter)」ダイアログにリストされる列ごとに、予想される値を示しています。

表 2. 「フィルター (Filter)」ダイアログ (「履歴照会 (Historical Queries)」) の有効な値

列	値
ID	照会 ID を表す数値

表 2. 「フィルター (Filter)」 ダイアログ (「履歴照会 (Historical Queries)」) の有効な値 (続き)

列	値
サブミッター ID	サブミッターの ID を表す文字ストリング
実行状況の説明	この照会で履歴分析データ生成プログラムが実行されたかどうかを示す単一の文字。可能な値は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • N (履歴分析データ生成プログラムは実行されていない) • S (履歴分析データ生成プログラムは正常に実行された) • F (履歴分析データ生成プログラムは実行されたが失敗した)

アプリケーション開発の機能強化

ルーチンの呼び出しにはルーチンに対する EXECUTE 特権が必要

DB2 バージョン 8.1 以降、ルーチン・レベル EXECUTE 特権が存在します。これにより、ルーチンのより安全な使用、およびルーチン実行特権の円滑な管理を可能にします。DB2 バージョン 8.1 以前は、ユーザーがルーチンを読み出すための特権は、ルーチン自身に対してではなく、ルーチンに関連付けられたパッケージに対して EXECUTE 特権を付与または取り消すことによって管理されていました。

ユーザーが正常にルーチン (メソッド、ストアド・プロシージャ、またはユーザー定義関数) を呼び出すには、以下の特権または許可が必要です。

特権要件:

ルーチンの呼び出し者になるユーザーは、少なくとも以下のいずれか 1 つを持っている必要があります。

- ルーチンに対する EXECUTE 特権
- SYSADM または DBADM 権限

ルーチンの定義者 (データベースにルーチンを作成するために CREATE ステートメントを実行するユーザー) は、少なくとも以下のいずれか 1 つを持っている必要があります。

- ルーチンに対する EXECUTE 特権
- SYSADM または DBADM 権限

5 ルーチンに対する EXECUTE WITH GRANT OPTION 特権を持つすべてのユーザー
5 (この特権が明示的に取り消されていない限り、これにはルーチンの定義者が含まれ
5 る)、あるいは SYSADM または DBADM 権限を持つユーザーは、ルーチンについての
5 明示的な GRANT EXECUTE を、PUBLIC、またはルーチンの呼び出し者のユーザーの
5 許可 ID に対して実行する必要があります。ルーチンについての EXECUTE 特権を
5 PUBLIC に対して付与すると、すべてのデータベース・ユーザーはこのルーチンを呼び
5 出せるようになるので、注意が必要です。

5 パッケージ所有者、ルーチン定義者、およびルーチン呼び出し者の関係:

5 パッケージ所有者

5 パッケージ所有者は、外部ルーチンのコンテキストにおいて、ルーチンのイン
5 プリメンテーションに関与する特定パッケージの所有者です。OWNER プリ
5 コンパイル/BIND オプションでパッケージの所有権がオーバーライドされ、別
5 のユーザーに設定されていない限り、パッケージ所有者は、パッケージをデー
5 タベースにバインドするために BIND コマンドを実行するユーザーです。
5 BIND コマンドの実行により、パッケージ所有者はパッケージにおける
5 EXECUTE WITH GRANT 特権を付与されます。ルーチン・ライブラリーまた
5 は実行可能ファイルは複数のパッケージで構成されている場合があるため、関
5 連する複数のパッケージ所有者が存在する場合があります。

5 ルーチン定義者

5 ルーチン定義者は、CREATE ステートメントを発行してデータベースにルーチ
5 ンを作成するユーザー ID です。一般的にルーチン定義者は DBA ですが、多
5 数の場合、ルーチン・パッケージ所有者でもあります。パッケージ・ロード時
5 間で、ルーチンが呼び出される場合、そのルーチンを実行する許可は、呼び出
5 し者の許可ではなく定義者の許可に照らしてチェックされ、ルーチンに関連付
5 けられたパッケージが実行されます。ルーチン定義者の役割は、以下のことを
5 実行するために、1 つのユーザー ID について特権をカプセル化すること
5 です。

- 5 • ルーチンの作成
- 5 • ルーチンのパッケージの実行
- 5 • ルーチンの実行
- 5 • ルーチンを実行するための特権を他のユーザー ID に付与

5 中央ルーチン特権を管理するのも、ルーチン定義者の役割です。CREATE ス
5 テートメントを実行してデータベースにルーチンを作成すると、ルーチン定義
5 者はルーチンに対する EXECUTE WITH GRANT OPTION を暗黙的に受け取
5 ります。ルーチンを呼び出すには、ルーチン定義者にルーチンのパッケージの
5 EXECUTE 特権も必要です。パッケージ所有者は、この特権を定義者に明示的
5 に付与する必要があります。ルーチン定義者にこれらの特権が一度付与され
5 ると、ルーチン定義者はルーチンを実行可能で、ルーチンの EXECUTE 特権をル
5 ーチン呼び出すユーザー ID に付与できます。ルーチン定義者のルーチン特

5 有の特権が取り消された場合、ルーチン定義者はそれ以降、そのルーチンを実
5 行できません。定義者から EXECUTE 特権を受け取ったユーザー ID も、そ
5 のルーチンを実行できません。実行時 (定義者) にルーチンのパッケージの実
5 行権をチェックされたユーザー ID には、すでに適切な特権がないためです。
5 これにより、ルーチン実行特権の割り振りと取り消しを集中管理できます。

5 **注:** SQL ルーチンの場合、ルーチン定義者は暗黙的にパッケージ所有者にもな
5 ります。したがって、定義者はルーチンとルーチン・パッケージに対する
5 EXECUTE WITH GRANT OPTION 特権を持つことになります。

5 ルーチン呼び出し者

5 ルーチン呼び出し者は、ルーチンを呼び出すユーザー ID です。ルーチンは、
5 コマンド・ウィンドウまたはアプリケーション・プログラム内から呼び出すこ
5 とができます。メソッドおよび UDF の場合、ルーチン参照は別の SQL ステ
5 ートメントに組み込まれますが、プロシージャは CALL ステートメントを
5 使用して呼び出されます。アプリケーション内の動的 SQL の場合、呼び出し
5 者は、すぐ上のレベルのルーチンか、またはルーチン呼び出しが入ったアプリ
5 ケーションのランタイム許可 ID です (ただしこの ID は、より高いレベルの
5 ルーチン/アプリケーションがバインドされた DYNAMICRULES オプションに
5 も依存する場合があります)。静的 SQL の場合、呼び出し者は、ルーチンの参
5 照を含むパッケージの、OWNER プリコンパイル/バインド・オプションの値で
5 す。これらのユーザー ID には、ルーチンに対する EXECUTE 特権が必要で
5 す。

5 ユーザーが、EXECUTE が許可されていないルーチンを呼び出そうとすると、
5 エラー (SQLSTATE 42501) が戻されます。このエラーは、ルーチンの定義者
5 が、ルーチンに関連付けられたパッケージに対する EXECUTE 特権を持ってい
5 ない場合にも戻されます。

5 DB2 バージョン 8.1 に移行された外部ルーチン:

5 DB2 バージョン 8.1 以前は、ユーザーがルーチンを呼び出すための特権は、ルーチン
5 に関連付けられたパッケージに対して EXECUTE 特権を付与して呼び出すことで管理さ
5 れていました。データベースの移行時には、データベースは以下のアクションを自動的
5 に実行します。

- 5 • EXECUTE WITH GRANT OPTION 特権が、移行された各ルーチンのルーチン
5 DEFINER に付与されます。
- 5 • EXECUTE 特権が、移行された各外部ルーチン (プロシージャ、関数、メソッド)
5 の PUBLIC に付与されます。
- 5 • EXECUTE 特権が、移行された各 SQL プロシージャにおいて、移行前にルーチ
5 ン・パッケージの EXECUTE 特権を持っていたユーザーに付与されます。

5 これらの特権の自動付与により、データベースの移行前にルーチンを呼び出し可能であ
5 ったユーザーはすべて、継続して呼び出せます。データベース管理者は、ルーチンの使

5 用を制限したい場合に、特定のデータベース・ユーザーのルーチンに対する EXECUTE
5 特権に REVOKE を実行できるようになりました。

5 データベース管理者は db2undgp コマンドを使用し、SQL にアクセスする外部ストアード
5 ・プロシージャを識別できます。データベース管理者は db2undgp コマンドを使用
5 して、すべてのデータベース・ユーザーからプロシージャに対する EXECUTE 特権を
5 取り消すこともできます。これは、SQL データにアクセスするすべてのルーチンを、誰
5 も実行できない状態にします。こうすると DBADM または SYSADM は、プロシージャ
5 を呼び出そうとしている特定のユーザーに対して、各ルーチンに対する GRANT
5 EXECUTE の実行を選択することができます。

5 例 1: 定義者がパッケージ所有者でもある場合のユーザーへの EXECUTE 特権の付与:

5 ルーチンは、プリコンパイル、バインド、および登録されます。ルーチン・パッケージ
5 所有者でもあるルーチン定義者は、ルーチンの EXECUTE 特権を、ルーチンを呼び出す
5 ユーザーに付与します。

5 アクション	5 アクションの結果
5 1) 外部ルーチンは、OWNER プリコンパ 5 イル/BIND オプションを使用せずに、ユ 5 ーザー USER1 によってプリコンパイルお 5 よびバインドされます。	5 USER1 がパッケージ所有者になります。 5 USER1 には、ルーチンに関連するパッケ 5 ージの EXECUTE WITH GRANT 5 OPTION 特権があります。
5 2) USER1 は CREATE ステートメントを 5 発行し、外部ルーチンを登録します。	5 USER1 が外部ルーチンの定義者になりま 5 す。USER1 には、ルーチンの EXECUTE 5 WITH GRANT 特権があります。
5 3) USER1 は、ルーチンの EXECUTE 特 5 権を USER2 に付与します。	5 これで、USER2 はルーチンを正常に呼び 5 出せます。
5 4) USER2 は、CALL ステートメントを使 5 用してルーチンを呼び出します。	5 ルーチンは USER2 によって正常に呼び出 5 されます。

5 例 2: 定義者がパッケージ所有者でない場合のユーザーへの EXECUTE 特権の付与:

5 外部ルーチンは、プリコンパイル、バインド、および登録されます。ルーチン定義者
5 は、ルーチンの EXECUTE 特権を、ルーチンを呼び出すユーザーに付与します。ルーチ
5 ン定義者がルーチン・パッケージ所有者から EXECUTE 特権を受け取れば、ルーチンを
5 正常に呼び出すことができます。

5 アクション	5 アクションの結果
5 1) 外部ルーチンは、OWNER プリコンパ 5 イル/BIND オプションを使用せずに、ユ 5 ーザー USER1 によってプリコンパイルお 5 よびバインドされます。	5 USER1 がパッケージ所有者になります。 5 USER1 には、ルーチンに関連するパッケ 5 ージの EXECUTE WITH GRANT 5 OPTION 特権があります。

5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5

アクション	アクションの結果
2) USER2 は CREATE ステートメントを発行し、外部ルーチンを登録します。	USER2 が外部ルーチンの定義者になります。 USER2 には、ルーチンの EXECUTE WITH GRANT OPTION 特権がありません。 USER2 には、ルーチンのパッケージの EXECUTE 特権はまだありません。
3) USER2 は、ルーチンの EXECUTE 特権を USER3 に付与します。	USER3 には、ルーチンの EXECUTE 特権があります。
4) USER3 は、CALL ステートメントを使用してルーチンを呼び出します。	USER2 にまだルーチンのパッケージの EXECUTE 特権がないため、USER3 のルーチン呼び出しは失敗します。
5) USER1 は、ルーチンのパッケージの EXECUTE 特権を USER2 に付与します。	これで、USER2 はルーチンおよびルーチンのパッケージを実行できます。
6) USER3 がルーチンを呼び出します。	ルーチンは、USER3 によって正常に呼び出されます。

5 管理の容易性の向上

5 DB2 バインディング・プロセスのためのポリシー定義

変数名	オペレーティング・システム	値
記述		
DB2AFFINITIES	AIX 5 またはそれ以降	デフォルト = 設定されない

5	変数名	オペレーティング・値
5		システム
5	記述	
5	NUMA 対応システムでのリソース・ポリシーを定義します。	
5	このレジストリー変数は、DB2 プロセスをオペレーティング・システムのリソースにバインドするためのポリシーを定義する、構成ファイルへのパスを指定できます。リソース・ポリシーにより、DB2 用に制限されるオペレーティング・システムのリソースを指定できます。各 DB2 プロセスは、セット内の単一のリソースにバインドされます。リソース割り当ては、循環型のラウンドロビン方式で行われます。	
5	以下にサンプルの構成ファイルを挙げます。	
5	Example 1: Bind all DB2 processes to either CPU 1 or 3.	
5	<code><RESOURCE_POLICY></code>	
5	<code><METHOD>CPU</METHOD></code>	
5	<code><RESOURCE>1</RESOURCE></code>	
5	<code><RESOURCE>3</RESOURCE></code>	
5	<code></RESOURCE_POLICY></code>	
5	Example 2: Bind DB2 processes to one of the following resource sets:	
5	<code>sys/node.03.00000,</code>	
5	<code>sys/node.03.00001,</code>	
5	<code>sys/node.03.00002,</code>	
5	<code>sys/node.03.00003</code>	
5	<code><RESOURCE_POLICY></code>	
5	<code><METHOD>RSET</METHOD></code>	
5	<code><RESOURCE>sys/node.03.00000</RESOURCE></code>	
5	<code><RESOURCE>sys/node.03.00001</RESOURCE></code>	
5	<code><RESOURCE>sys/node.03.00002</RESOURCE></code>	
5	<code><RESOURCE>sys/node.03.00003</RESOURCE></code>	
5	<code></RESOURCE_POLICY></code>	
5	注: RSET メソッドを使用するには CAP_NUMA_ATTACH 機能が必要です。	

AIX における接続ユーザーのログイン制限の制御

デフォルトでは、ユーザーが AIX サーバーに認証されると、DB2 は、接続ユーザーのローカル・ログイン制限を検査してから、接続の進行を許可します。

DB2LOGINRESTRICTIONS レジストリー変数を使用すると、DB2 のログイン制限代替モードを実施できます。DB2LOGINRESTRICTIONS を設定しないと、このデフォルト値は LOCAL です。この変数は、以下の値に設定できます。

REMOTE DB2 はリモート・ログイン制限のみを実行します。

SU DB2 は su 制限のみを実行します。

NONE DB2 はログイン制限の特定モードを実行しません。

LOCAL DB2 はローカルのログイン制限のみを実行します。

- 5 どの場合も、DB2 は次のエラー条件について検査します。
- 5 • 期限切れアカウント
- 5 • ロックされているアカウント
- 5 • 無効なユーザー

既知の問題と対処方法 (バージョン 8.1 フィックスパック 5)

以下に、DB2® Universal Database バージョン 8 フィックスパック 5 の現在知られている制限、問題、および対処方法を示します。このセクションの情報は、DB2 Universal Database™ のバージョン 8 フィックスパック 5 リリースと、そのサポート対象製品にのみ該当します。制限および制約事項は、他のリリースには該当しない場合があります。

製品および製品レベルのサポート

Linux および UNIX ベースのシステムにおける代替フィックスパック

DB2 Universal Database バージョン 8 より前では、フィックスパックは 1 つの固定ロケーションにインストールされた DB2 Universal Database パッケージまたはファイル・セットを更新するものでした。それは基本的に、フィックスパックのインストールによって、既存のファイルがフィックスパックに備わった更新済みのファイルに置き換えられることを意味します。つまり 1 つのシステムに複数のレベルの DB2 フィックスパックは存在できませんでした。複数のフィックスパック・レベルの DB2 Universal Database バージョン 8.1 Enterprise Server Edition (ESE) が、同一システムに共存できるようになりました。バージョン 8.1.2 以来、実稼働環境でサポートされるようになったこのフィーチャーは、次の 2 種類のフィックスパックを使用することによって実現されました。

通常のフィックスパック

- ESE に限らず、関連プラットフォーム用にサポートされる DB2 V8.1 製品すべてで使用可能
- 既存のインストール、つまり AIX® では /usr/opt/db2_08_01、他のプラットフォームでは /opt/IBM/db2/V8.1 に直接インストール可能

代替フィックスパック

- DB2 Universal Database ESE の完全な新規コピーとしてインストール可能
- 通常の DB2 Universal Database のインストール・ロケーションではなく、事前定義のロケーションにインストール

注:

1. 複数フィックスパックのインストールが不要な環境では、実行する必要はありません。
2. IBM DB2 Universal Database Enterprise Server Edition (ESE) for Linux and UNIX® バージョン 8.1.2 以来、複数フィックスパックとしてインストールされた場合に、フィックスパックが実稼働環境でサポートされるようになりました。

- 3 複数フィックスパック・インスタンスを別のフィックスパック・レベルに更新するに
3 は、次のいずれかのオプションを実行します。
- 3 • 通常の適切なフィックスパックを一般出荷版 (GA) インストールに上書きインストー
3 ルし、既存の GA パスから db2iupdt を実行してインスタンスを更新する。
 - 3 • 適切な代替フィックスパックを固有のパスにインストールし、そのパスから db2iupdt
3 を実行してインスタンスを更新する。
- 3 代替フィックスパックのダウンロードの詳細については、IBM® サポート・サイト
3 (<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) を参照してください。

バックレベル DB2 Universal Database サーバーのサポート

すべての DB2 Universal Database サーバーをバージョン 8 に移行する前に DB2 Universal Database クライアント・システムをバージョン 8 に移行する場合は、いくつかの制限や制約事項があります。

バージョン 8 クライアントをバージョン 7 サーバーで処理する場合は、バージョン 7 サーバー上で DRDA® アプリケーション・サーバー機能を構成して使用可能にする必要があります。これを行う方法については、バージョン 7 の「*Installation and Configuration Supplement*」を参照してください。DB2 Universal Database バージョン 8 クライアントから DB2 Connect™ バージョン 7 サーバーにアクセスすることはできません。

バージョン 8 クライアントからバージョン 7 サーバーにアクセスするときは、以下のものはサポートされません。

- 以下のデータ・タイプ:
 - ラージ・オブジェクト (LOB) データ・タイプ
 - ユーザー定義特殊タイプ
 - DATALINK データ・タイプ
DATALINK データ・タイプを使うと、非リレーショナル・ストレージ内にある外部データを管理できます。DATALINK データ・タイプは、物理的に DB2 Universal Database の外部にあるファイル・システムに置かれたファイルを参照します。
- 以下のセキュリティー機能:
 - 認証タイプ SERVER_ENCRYPT
SERVER_ENCRYPT は、パスワードを暗号化する方式です。暗号化したパスワードをユーザー ID とともに使用して、ユーザーを認証します。
 - パスワードの変更
バージョン 7 サーバー上のパスワードをバージョン 8 クライアントから変更することはできません。
- 以下の接続および通信プロトコル:

- 接続ではなく ATTACH を必要とするインスタンス要求
バージョン 8 クライアントからバージョン 7 サーバーへの ATTACH はサポートされていません。
- TCP/IP 以外のネットワーク・プロトコル
(SNA、NetBIOS、IPX/SPX など)
- 以下のアプリケーション機能およびタスク:
 - ODBC/JDBC 以外のすべてのアプリケーション用の DESCRIBE INPUT ステートメント
バージョン 7 サーバーにアクセスする ODBC/JDBC アプリケーションを実行するバージョン 8 クライアントをサポートするには、このタイプのアクセスが必要なすべてのバージョン 7 サーバーに、DESCRIBE INPUT サポート用の修正プログラムを適用してください。この修正は、APAR IY30655 に関連しています。いずれかの DB2 Universal Database ドキュメンテーション・セット (PDF または HTML) の『IBM への連絡方法』を参照して、APAR IY30655 に関連する修正プログラムの入手方法を確認してください。
DESCRIBE INPUT ステートメントを使用すると、アプリケーション・リクエスターは準備済みステートメントにおける入力パラメーター・マーカーについての記述を入手でき、パフォーマンスおよびユーザビリティが改善されます。CALL ステートメントの場合、これは、ストアード・プロシージャー用の IN および INOUT パラメーターに関連したパラメーター・マーカーも含まれます。
 - 2 フェーズ・コミット
バージョン 8 クライアントが関与する整合トランザクションの使用時には、バージョン 7 サーバーをトランザクション・マネージャー・データベースとして使用できません。また、バージョン 8 サーバーがトランザクション・マネージャー・データベースである場合、バージョン 7 サーバーが整合トランザクションに関与することもできません。
 - XA 準拠のトランザクション・マネージャー
バージョン 8 クライアントを使用するアプリケーションは、バージョン 7 サーバーを XA リソースとして使用できません。これには、トランザクション管理の一部となっている WebSphere[®]、Microsoft[®] COM+/MTS、BEA WebLogic などが含まれます。
 - モニター
 - クライアントからサーバーに向けて開始されるユーティリティー
 - サイズが 32KB を超える SQL ステートメント

バージョン 7 サーバーと連動するバージョン 8 ツールには、同様の制限や制約事項があります。

以下のバージョン 8 GUI ツール、製品、およびセンターは、バージョン 8 サーバーのみサポートします。

- コントロール・センター
- デベロップメント・センター
- ヘルス・センター (Web バージョンのセンターを含む)
- 未確定トランザクション・マネージャー
- インフォメーション・カタログ・センター (Web バージョンのセンターを含む)
- ジャーナル
- ライセンス・センター
- サテライト管理センター
- Spatial Extender
- タスク・センター
- ツール設定

以下のバージョン 8 ツールは、バージョン 7 サーバーをサポートします (制約事項あり)。

- コマンド・センター (Web バージョンのセンターを含む)
 - スクリプトの保管、インポート、およびスケジューリングは、コマンド・センターではサポートされません。
- データウェアハウス・センター
- レプリケーション・センター
- 構成アシスタントのインポート/エクスポート構成ファイル機能
- SQL アシスト
- Visual Explain

一般的に、コントロール・センターのナビゲーション・ツリーからのみ起動するバージョン 8 のツールや、そのようなツールを基盤とする詳細ビューはいずれも、バージョン 7 およびそれ以前のサーバーで利用したり、そこへアクセスすることはできません。バージョン 7 以前のサーバーで作業する場合は、バージョン 7 のツールを使用できるかどうかに注意してください。

クラシック・コネクトは使用不可

クラシック・コネクト製品は、使用できません。データウェアハウスのドキュメンテーションやその他のもので、クラシック・コネクト製品を参照している場合がありますが、現在は該当しないため無視してください。

データウェアハウス・センターの下位レベル・サーバーのサポート制限

DB2 Universal Database (DB2 UDB) Enterprise Server Edition バージョン 8 データウェアハウス・センターの下位レベル・サーバーのサポートには、以下の制限があります。

ラージ・オブジェクト (LOB) サポート

- ウェアハウス・コントロール・データベースを DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8 より前のサーバーで使用している場合、LOB での作業はできません。ウェアハウス・コントロール・データベースを正しいレベルにアップグレードするか、または DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8 ウェアハウス・サーバーがインストールされ、システムからローカルで使用されているシステムに、コントロール・データベースを移動する必要があります。
- LOB をデータウェアハウス・センターと DB2 間で移動する場合は、DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8 にアップグレードする必要があります。

Systems Network Architecture (SNA) サポート

SNA を使用してウェアハウス・ソースおよびターゲットに接続する場合は、構成を SNA 上の TCP/IP に変更するか、または Windows NT[®] ウェアハウス・エージェントを使用する必要があります。

EXPORT および LOAD ユーティリティのサポート

ウェアハウス・エージェントをアップグレードする場合は、ソース・ターゲット・データベースもアップグレードするか、またはウェアハウス・プロセス内の EXPORT および LOAD ユーティリティを SQL Select および Insert ステップで置き換えなければなりません。SQL Select および Insert ステップは、後ろに SELECT および INSERT コマンドが続く DELETE* コマンドを使用します。SQL Select および Insert ステップには、すべてのトランザクションをログに記録するデータベースが必要です。そのため、SQL Select および Insert ステップのパフォーマンスは、EXPORT および LOAD ユーティリティ用のものほど効率的ではありません。

4 HP-UX on IA64 のデータベース移行

4 DB2 for HP-UX on IA64 のデータベース移行は、バージョン 8.x リリース全体においてサポートされません。

4 DB2 for HP-UX on IA64 では、バージョン 7 DB2 バックアップ・イメージをバージョン 8 インスタンスに復元できません。

DB2 Universal Database Workgroup Server Edition 用の DB2 ライセンス・ポリシー

「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」資料およびライセンス・センターのオンライン・ツール・ヘルプでは別の記述がありますが、インターネット・ライセンス・ポリシーは DB2 Universal Database Workgroup Server Edition では使用できません。インターネット・ユーザー用のライセンスが必要な場合は、DB2 Universal Database Workgroup Server Unlimited Edition を購入する必要があります。

DB2 Universal Database バージョン 7 サーバー・アクセス

バージョン 8 クライアントから Linux、UNIX、または Windows® オペレーティング・システム上の DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーにアクセスするには、サーバーにバージョン 7 フィックスパック 8 以降をインストールし、**db2updv7** コマンドを実行する必要があります。バージョン 7 フィックスパックのインストール方法については、バージョン 7 フィックスパックの Readme およびリリース情報の資料を参照してください。

DB2 Universal Database バージョン 8 クライアントから DB2 Connect バージョン 7 サーバーにアクセスすることはできません。

データウェアハウス・センターの中国語 (簡体字) 非サポート

データウェアハウス・センターは中国語 (簡体字) では使用できません。そのため、次の従属 DB2 コンポーネントもこの環境では使用できません。

- DB2 Warehouse Manager。
- DB2 Warehouse Manager Connector for the Web および DB2 Warehouse Manager Connector for SAP (DB2 Warehouse Manager のインストールに従属)。
- インフォメーション・カタログ・センター (DB2 Warehouse Manager のインフォメーション・カタログの管理ウィザード・コンポーネントに従属)。

DB2 Web ツール

以下の言語では、DB2 Web ツールでサポートされるアプリケーション・サーバーは、サブレット 2.3 仕様に準拠している必要があります。

- 日本語
- 韓国語
- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)
- ロシア語
- ポーランド語

DB2 UDB for OS/390 バージョン 6 および DB2 UDB for z/OS バージョン 7 での SQLJ および SQL アシストのサポートに必要なデベロップメント・センター APAR

Windows または UNIX オペレーティング・システム上の DB2 Universal Database バージョン 8 用の Application Development Client でデベロップメント・センターを使用するときは、SQLJ および SQL アシストのサポートを有効化するために以下の APAR をインストールする必要があります。

DB2 UDB for z/OS バージョン 7

- 2 • PQ65125 - Java SQLJ ストアド・プロシージャーを構築するための SQLJ
- 2 サポートを提供します。
- 2 • PQ62695 - SQL アシストのサポートを提供します。
- 2 **DB2 UDB for OS/390® バージョン 6**
- 2 • PQ62695 - SQL アシストのサポートを提供します。

64 ビット・オペレーティング・システムでのデベロップメント・センターの制約事項

64 ビット・サーバーに対する Java ストアド・プロシージャーのデバッグは、デベロップメント・センターではサポートされていません。 SQL ストアド・プロシージャーのデバッグは、64 ビットの Windows オペレーティング・システムでサポートされています。 OLE DB と XML は、64 ビット・サーバーではサポートされていません。

デベロップメント・センターが OS/390 または z/OS サーバー上で実行される SQL ステートメントの実コスト情報をサポート

DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS (バージョン 6 およびバージョン 7) 上で実行される SQL ステートメントの実コスト情報を、DB2 デベロップメント・センターから取得できるようになりました。

- 1 • CPU 時間
- 1 • CPU 時間 (外部形式)
- 1 • CPU 時間 (100 分の 1 秒単位の整数)
- 1 • ラッチ/ロック競合待ち時間 (外部形式)
- 1 • 取得ページ数 (整数形式)
- 1 • 読み取り I/O 数 (整数形式)
- 1 • 書き込み I/O 数 (整数形式)

この機能を使用すると、さまざまなホスト変数値を指定された単一 SQL ステートメントの実コスト結果の複数セットを表示することもできます。

実コスト情報は、デベロップメント・センターの、「SQL ストアド・プロシージャーの作成 (Create SQL Stored Procedure)」および「Java ストアド・プロシージャーの作成 (Create Java Stored Procedure)」ウィザードでの OS/390 および z/OS 接続用の SQL ステートメント・ウィンドウから取得できます。実コスト機能を使用するには、いずれかのストアド・プロシージャー・ウィザードで、「OS/390 および z/OS 接続 (OS/390 and z/OS connection)」ウィンドウにある「**実コスト (Actual Cost)**」ボタンをクリックします。実コスト機能を使用するには、DB2 OS/390 サーバーにストアド・プロシージャー・モニター・プログラム (DSNWSMP) をインストールしておく必要があります。

2 Linux オペレーティング・システム上のデベロップメント・センター

2 いくつかの Linux ディストリビューション (32 ビット、64 ビット、Intel、 zSeries、ま
2 たは iSeries) で実行中の Java™ ストアード・プロシージャーをデバッグする際にデベ
2 ロップメント・センターを使用することはできません。

フェデレーテッド・システムの制約事項

DB2 Universal Database (Linux、UNIX、 および Windows 版) バージョン 7.2 フェデレーテッド・データベースのユーザーについて:

DB2 Universal Database (DB2 UDB) (UNIX および Windows 版) バージョン 8 の表およびビューのニックネームを作成するには、DB2 UDB (UNIX および Windows 版) バージョン 7.2 フィックスパック 8 を、DB2 UDB (UNIX および Windows 版) バージョン 7.2 フェデレーテッド・データベースに適用する必要があります。フィックスパック 8 を DB2 UDB バージョン 7.2 (UNIX および Windows 版) フェデレーテッド・データベースに適用していない場合、ニックネームにアクセスするとエラーが発生します。

LONG VARCHAR および LONG VARGRAPHIC サポート:

フェデレーテッド・システムのドキュメンテーションは、DB2 ファミリー製品で使用される LONG VARCHAR および LONG VARGRAPHIC データ・タイプはサポートされないことを示しています。しかし、サポートされるデータ・タイプも存在します。LONG VARCHAR および LONG VARGRAPHIC データ・タイプ列が含まれる DB2 Universal Database (Linux、 UNIX、 および Windows 版) のデータ・ソース・オブジェクトにはニックネームを作成できます。これらのリモート列は DB2 Universal Database (Linux、 UNIX、 および Windows 版) の LOB データ・タイプにマップされます。DB2 ファミリーの他の製品については、これらのデータ・タイプを省略または再作成するビューを作成した後、このビューに対するニックネームを作成できます。

WITH HOLD カーソル:

1 ニックネームまたは PASSTHRU セッションで定義されたカーソルで WITH HOLD セ
1 マンティクスを使用できます。ただし、このセマンティクスを (COMMIT 指定で) 使用
1 しようとした場合に、データ・ソースが WITH HOLD セマンティクスをサポートして
1 ないと、エラーを受け取ることになります。

データ・ソース:

3 以前はサポートされていなかったデータ・ソースが、DB2 Information Integrator リレ
3 ショナルおよび非リレシヨナル・ラッパーを使用してバージョン 8.1.2 からサポー
3 トされます。サポートされるデータ・ソースの完全なリストについては、DB2

3 Information Integrator の DB2 インフォメーション・センターを参照してください (「製
3 品概要」 -> 「フェデレーテッド・システム - 概要」 -> 「データ・ソース」 -> 「サポート
3 されるデータ・ソース」)。

DB2 Universal Database Server for VM and VSE のサポート:

DB2 Universal Database Server for VM and VSE のフェデレーテッド・サポートが、バージョン 8.1.2 に追加されました。

製品サポート:

3 以前はサポートされていなかった製品が、Information Integrator によってサポートされ
3 ます。

3 • DB2 Relational Connect は、DB2 Information Integrator のリレーショナル・ラッパー
3 の使用によりサポートされます。

3 • DB2 Life Sciences Data Connect は、DB2 Information Integrator の非リレーシヨナ
3 ル・ラッパーの使用によりサポートされます。

サポートされないオペレーティング・システム:

フェデレーテッド・システムは Windows ME オペレーティング・システムではサポート
トされていません。

データ・ソースにアクセスするフェデレーテッド・サーバーのセットアップ:

3 コンパクト・インストール・オプションでは、DB2 ファミリーまたは Informix™ デー
3 タ・ソースへの必要なアクセスはインストールされません。DB2 ファミリー・デー
3 タ・ソースにアクセスするには、標準またはカスタム・インストールを使用する必要が
3 あります。カスタム・インストールのみで、DB2 ファミリーと Informix データ・ソー
3 スの両方へのアクセスをインストールできます。

ラッパー作成のためのフェデレーテッド・データベースの更新:

3 DB2 UDB バージョン 8.1 または DB2 UDB バージョン 8.1 フィックスパック 1 を使
3 用して作成した DB2 Universal Database (DB2 UDB) バージョン 8.1.2 以降でフェデレ
3 レーテッド・データベースを使用する場合、db2updv8 コマンドを使用して、フェデレ
3 レーテッド・データベースを更新する必要があります。

構文:

3 ►►—db2updv8—d—database-name—
3 └—u—userid—p—password—┘

3

3 データベースをバージョン 8.1.2 に更新しないと、コントロール・センターの Federated
3 Database Objects フォルダーからラッパーを作成するときに、次のいずれかのエラー・
3 メッセージが表示されます。

3 • java.lang.NullPointerException

3 • [IBM][CLI Driver][DB2/NT] SQL0444N Routine "GET_WRAP_CFG_C"
3 (specific name "SQL030325095829810") is implemented with code in
3 library or path "%GET_WRAP_CFG_C", function "GET_WRAP_CFG_C"
3 which cannot be accessed. Reason code: "4". SQLSTATE=42724

3 フェデレーテッド・システム・データベース・ディレクトリーでの DB2 ファミリー・ データ・ソースのカタログ:

リモート・データベースの名前が 9 文字以上の場合は、データベース接続サービス (DCS) ディレクトリー項目を作成する必要があります。

CATALOG DCS DATABASE コマンドを使用して DCS ディレクトリー内の項目をデータベースにカタログする例は、以下のとおりです。

```
CATALOG DCS DATABASE SALES400 AS SALES_DB2DB400
```

各要素の意味は以下のとおりです。

SALES400

CATALOG DATABASE コマンドで入力したリモート・データベースの名前です。

AS SALES_DB2DB400

カタログするターゲット・ホスト・データベースの名前です。

DB2 Universal Database Workgroup Server Edition に組み込まれた高可用性機能

DB2 Workgroup Server Edition のトピックには明記されていませんが、DB2 Enterprise Server Edition のトピックで言及されている DB2 Universal Database Enterprise Server Edition の高可用性機能は、DB2 Universal Database Workgroup Server Edition に含まれています。

4 HP-UX JDBC ドライバー制約事項

4 IBM DB2 Universal JDBC ドライバーでは、HP のデフォルト文字セット roman8 で作
4 成されたデータベースには接続できません。汎用 JDBC ドライバーを使用するすべての
4 SQLJ および JDBC アプリケーションは、別の文字セットで作成されたデータベースに
4 接続する必要があります。使用している LANG が「C」または「roman8」ロケールに設
4 定されている場合、これに対応する ISO ロケールに変更する必要があります。例え
4 ば、ご使用の LANG が de_DE.roman8 に設定されている場合は、次のコマンドを実行
4 して de_DE.iso88591 に変更してください。

```
4 export LANG=de_DE.iso88591
```

4 DB2 SQLJ および JDBC サンプル・プログラムを汎用 JDBC ドライバーで実行するに
4 は、次のコマンドを使用してサンプル・データベースを作成することができます (この
4 例では、米国英語の ISO ロケールを使用)。


```
4 export LANG=en_US.iso88591
4 db2 terminate
4 db2samp1
```

4 **注:** サンプル・データベースがすでに存在している場合は、**db2samp1** コマンドを実行
4 する前にドロップしておく必要があります。

4 **Microsoft Visual Studio .NET 用の DB2 Development Add-In**

2 Microsoft Visual Studio .NET 用の IBM DB2 Development Add-In は、以下のものをサ
2 ポートしていません。

- 2 • DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 バージョン 8
- 2 • DB2 Universal Database for iSeries バージョン 8

5 **Linux で必要な IBM Developer Kit for Java 1.3.1 (x86、32 ビット)**

5 DB2 が、DB2 コントロール・センターを使用、またはストアード・プロシージャーお
5 よびユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成および実行するには、IBM
5 Developer Kit for Java 1.3.1 Service Release 4 が必要です。IBM Developer Kit for Java
5 のみがサポートされます。

5 IBM Developer Kit for Java は、Java を必要とするコンポーネントがインストールされ
5 ている場合にインストールされます。ただし、IBM Developer Kit for Java 1.3.1 がすで
5 にインストールされていることをインストーラーが検出した場合、再びインストールさ
5 れることはありません。IBM Developer Kit for Java 1.3.1 は独自のディレクトリーにイ
5 ンストールされ、以前のレベルの IBM Developer Kit for Java を上書きすることあり
5 ません。

5 **制約事項:**

5 以下の DB2 インストール方法のいずれか 1 つを使用している場合は、IBM Developer
5 Kit for Java のインストールのみが試行されます。

- 5 • GUI インストール・プログラム (db2setup)
- 5 • 応答ファイル・インストール (db2setup -r response_file)

5 **手順:**

5 IBM Developer Kit for Java を手動でインストールする場合、/cdrom/db2/linux/Java-1.3.1
5 ディレクトリーから以下のコマンドを実行してください。

```
5 rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.3.1-4.0.i386.rpm
```

5 このコマンドにより、IBM Developer Kit for Java が /opt/IBMJava2-131 ディレクトリ
5 ーにインストールされます。

5 IBM Developer Kit for Java がインストールされたことを確認するには、UNIX® シェ
5 ル・プロンプトから以下のコマンドを実行してください。

5 <path>/jre/bin/java -version

5 <path> は、Java がインストールされるパスを表します。例えば、インストール・ディ
5 レクトリー・パスが /opt/IBMJava2-131/ の場合、コマンドは次のようになります。

5 /opt/IBMJava2-131/jre/bin/java -version

5 以下のような出力が得られます。

5 java version "1.3.1"
5 Java(TM) 2 Runtime Environment, Standard Edition (build 1.3.1)
5 Classic VM (build 1.3.1, J2RE 1.3.1 IBM build
5 cxia32131-20030329 (JIT enabled: jitc))

5 IBM Developer Kit for Java は、IBM developerWorks Web サイト
5 <http://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/index.html> から入手できます。

3 AIX でのインストール

3 空白を含むパスのディレクトリーから db2setup プログラムを実行した場合、セットア
3 ュップは失敗し、次のエラーが表示されます。

3 <file>: not found

3 空白を含まないパスのディレクトリーに、インストール可能なイメージをセットしてく
3 ださい。

AIX オペレーティング・システムでの中国語 (簡体字) ロケール

3 AIX では、中国語 (簡体字) ロケールにバインドされたコード・セットが変更されてい
3 ます。

- 3 • AIX バージョン 5.1.0000.0011 以上
- 3 • AIX バージョン 5.1.0 (保守レベル 2 以上を適用)

3 コード・セットは、GBK (コード・ページ 1386) から GB18030 (コード・ページ 5488
3 または 1392) に変更されました。DB2 Universal Database for AIX は、元来 GBK を
3 サポートし、また Unicode で GB18030 コード・セットをサポートするため、DB2
3 Universal Database における Zh_CN ロケールのデフォルトのコード・セットは ISO
3 8859-1 (コード・ページ 819) になりますが、操作によっては、このロケールのデフォル
3 トの地域はアメリカ合衆国 (US) にもなります。

この制約事項に対する対処法として、以下の 2 とおりのオプションがあります。

- ロケールのコード・セットを GB18030 から GBK にオーバーライドし、地域を US
から China (地域 ID は CN、地域コードは 86) にオーバーライドできます。
- 別の中国語 (簡体字) ロケールを使用できます。

最初のオプションを使用する場合、以下のコマンドを発行します。

```
db2set DB2CODEPAGE=1386
db2set DB2TERRITORY=86
db2 terminate
db2stop
db2start
```

2 番目のオプションを使用する場合、ロケールを Zh_CN から ZH_CN または zh_CN に変更します。ZH_CN ロケールのコード・セットは Unicode (UTF-8) であるのに対し、zh_CN ロケールのコード・セットは eucCN (コード・ページ 1383) です。

2 Linux でのインストール

2 バージョン 8.1 の DB2 Universal Database を Linux にインストールすると、RPM ベ
2 ースのインストールでは IBM Java RPM (IBMJava2-SDK-1.3.1.-2.0.i386.rpm) のインスト
2 ールが試みられます。さらに新しいレベルの RPM (たとえば
2 IBMJava2-SDK-1.4.0.-2.0.i386.rpm) がすでに存在している場合、バックレベルの RPM は
2 インストールされません。

2 ただしそのような場合でも、Java 1.3 パスの /opt/IBMJava2-14/ を指す JDK_PATH デ
2 ータベース構成パラメーターはそのままになります。その結果、DB2 ツール・カタログ
2 のインストールなどの、Java に依存する機能はいずれも作動しなくなります。

2 この問題を解決するには、インスタンス所有者として次のようなコマンドを実行しま
2 す。

```
2 db2 update dbm cfg using JDK_PATH /opt/IBMJava2-14
```

2 このコマンドは、DB2 Universal Database に正しい IBM Developer Kit を指示します。

Red Hat オペレーティング・システムでの中国語 (簡体字) ロケール

5 Red Hat Enterprise Linux [RHEL] バージョン 2.1 および 3 を含む、Red Hat バージョ
5 ン 8 以降では、中国語 (簡体字) 用のデフォルトのコード・セットが、GBK (コー
5 ド・ページ 1386) から GB18030 (コード・ページ 5488 または 1392) に変更されまし
5 た。

3 DB2 Universal Database for Linux は、元来 GBK をサポートし、また Unicode で
3 GB18030 コード・セットをサポートするため、DB2 Universal Database におけるデフォ
3 ルトのコード・セットは ISO 8859-1 (コード・ページ 819) になりますが、操作によっ
3 ては、デフォルトの地域はアメリカ合衆国 (US) にもなります。

3 この制約事項に対する対処法として、以下の 2 とおりのオプションがあります。

- 3 • Red Hat のロケールのコード・セットを GB18030 から GBK にオーバーライドし、
3 地域を US から China (地域 ID は CN、地域コードは 86) にオーバーライドできま
3 す。
- 3 • 別の中国語 (簡体字) ロケールを使用できます。

最初のオプションを使用する場合、以下のステートメントを発行します。

```
db2set DB2CODEPAGE=1386
db2set DB2TERRITORY=86
db2 terminate
db2stop
db2start
```

2 番目のオプションを使用する場合、以下のいずれかのコマンドを発行します。

```
export LANG=zh_CN.gbk
export LANG=zh_CN
export LANG=zh_CN.utf8
```

zh_CN に関連したコード・セットは eucCN またはコード・ページ 1383、zh_CN.utf8 はコード・ページ 1208 です。

アジア言語のフォントの可用性 (Linux)

IBM では、アジア言語文字用に追加された 2 バイト文字セット (DBCS) サポートを含む、Linux 用の追加フォント・パッケージを提供しています。これらのフォント・パッケージは、各国または地域特有の文字を表示するために必要なフォントだけをインストールする、いくつかのバージョンの Linux において必要になります。

db2setup コマンドを実行したときに、DB2 セットアップ・ウィザード・インターフェースに文字の欠落を見つけた場合は、すべての必要なフォントがご利用の Linux システムにインストールされていない可能性があります。 **db2setup** で、インストール CD-ROM に埋め込まれているフォントを適切に参照するには、以下を実行してください。

1. 次のコマンドを入力します。 **export**

```
JAVA_FONTS=/<cdrom>/db2/<linux_platform>/java/jre/lib/fonts ここで、  
<cdrom> はインストール・イメージの場所、<linux_platform> は Linux から始まる  
ディレクトリー名を示します。
```

2. **db2setup** コマンドを再実行します。

インストール後、DB2 GUI ツールの使用中に文字の欠落に気付いた場合は、DB2 製品と共に提供された必要フォントをインストールしてください。これらのフォントは、以下の CD-ROM の **fonts** ディレクトリーにあります。

- *IBM Developer Kit, Java Technology Edition, Version 1.3.1 for AIX operating systems on 64-bit systems*
- *Java application development and Web administration tools supplement for DB2, Version 8.1.*

このディレクトリーでは、Times New Roman WorldType および Monotype Sans Duospace WorldType の 2種類の書体を選択できます。各書体には、各国または地域特有のフォントがあります。次の表に、**fonts** ディレクトリーに圧縮フォーマットで収めら

5 れている 8 種類のフォントをリストします。

5

フォント書体	フォント・ファイル名	国/地域
Times New Roman WT J	tnrwt_j.zip	日本およびその他の国/地域
Times New Roman WT K	tnrwt_k.zip	韓国
Times New Roman WT SC	tnrwt_s.zip	中国 (簡体字)
Times New Roman WT TC	tnrwt_t.zip	台湾 (繁体字)
Monotype Sans Duospace WT J	mtsansdj.zip	日本およびその他の国/地域
Monotype Sans Duospace WT K	mtsansdk.zip	韓国
Monotype Sans Duospace WT SC	mtsansds.zip	中国 (簡体字)
Monotype Sans Duospace WT TC	mtsansdt.zip	台湾 (繁体字)

5 **注:** これらのフォントは、システム・フォントを置き換えません。これらのフォント
5 は、DB2 Universal Database と共に、または DB2 Universal Database を使用するた
5 めに使用されます。これらのフォントの一般または無制限の販売、または配布を行
5 うことはできません。

5 フォントをインストールするには、以下を実行します。

- 5 1. フォント・パッケージを `unzip` します。
- 5 2. フォント・パッケージを `/opt/IBMJJava2-131/jre/lib/fonts` ディレクトリーにコピー
5 ーします。このディレクトリーがない場合は、作成してください。
- 5 3. コマンド `export JAVA_FONTSDS=/opt/IBMJJava2-131/jre/lib/fonts` を入力します。

5 最低でも、国または地域用のフォントを書体ごとに 1 つインストールする必要があります。
5 中国、韓国、または台湾にお住まいの場合は、各国特有または地域特有のバージョ
5 ンを使用してください。それ以外の方は、日本語バージョンのフォントを使用してくだ
5 さい。システムにスペースがある場合には、8 種類すべてのフォントをインストールす
5 ることをお勧めします。

ライセンス・センターのバックレベル・バージョンの非サポート

バージョン 7 のライセンス・センターが、バージョン 8 サーバーに接続しようとする
と、ライセンス・センターは「SQL1650 - 機能はサポートされていません」というエラ
ー・メッセージを受け取ります。これは接続がサポートされていないことを示します。

Microsoft Visual Studio、Visual C++

DB2 デベロップメント・センターのオンライン・ヘルプには「Build not successful: -1」エラーの場合の可能な解決策が記載されていますが、Microsoft Visual Studio Visual C++ バージョン 5.0 は、SQL ストアード・プロシージャの開発用にはサポートされません。ただし、Microsoft Visual Studio Visual C++ バージョン 6.0 はサポートされます。追加の構成情報は、「*IBM DB2 アプリケーション開発ガイド: アプリケーションの構築および実行*」に記載されています。

Merant Driver Manager の非互換性 (UNIX)

Merant Driver Manager が、UNIX で DB2 の ODBC ドライバーにアクセスする場合、Unicode サポートとの非互換が発生します。これらの非互換性により、アプリケーションがその使用を要求しない場合でも、Merant Driver Manager で Unicode が使用されるようになります。この状態は、データウェアハウス・センター、インフォメーション・カタログ・マネージャー、および MQSI のような、IBM 以外のデータ・ソースをサポートするために Merant Driver Manager を必要とする製品で問題が起きることがあります。永久的なソリューションが使用可能になるまで、Unicode サポートを使用せずに、代替の DB2 ODBC ドライバー・ライブラリーを使用できます。

Unicode サポートを使用しない代替の DB2 ODBC ドライバー・ライブラリーは、DB2 UDB Version 8.1 for AIX、DB2 UDB Version 8.1 for HP-UX、および DB2 UDB Version 8.1 for Solaris Operating Environment に組み込まれています。この代替ライブラリーを使用するには、そのコピーを作成し、コピーに元の DB2 ODBC ドライバー・ライブラリー名を付ける必要があります。

注: 代替の (36) ライブラリーには、DB2 JDBC ドライバーに必要な Unicode 機能が含まれます。WebSphere Application Server を含む JDBC アプリケーションは、このライブラリーを使用して、DB2 で正常に作業を行うことができます。

AIX、HP-UX、または Solaris オペレーティング環境で、非 Unicode ODBC ライブラリーに切り替えるには、以下の説明に従ってください。これは手動によるプロセスであるため、連続したフィックスパックやモディフィケーション・レベルを適用した後も含め、製品のアップデートのたびに実行する必要があります。

手順:

AIX

必要なライブラリーを AIX 上に作成するには、以下を実行します。

1. インスタンス所有者として **db2stop force** コマンドを使用し、すべてのデータベース・インスタンスをシャットダウンします。
2. DB2 管理サーバー (DAS) インスタンス ID を使用し、**db2admin stop force** コマンドで DAS インスタンスをシャットダウンします。

- 5 3. /usr/lpp/db2_81/lib ディレクトリーの元の db2.o ファイルをバックアップ
5 プします。
- 5 4. root 権限を使用し、**slibclean** コマンドを実行します。
- 5 5. ファイル db2_36.o をバックアップ・ファイル db2.o にコピーし、所有権お
5 よび権限が整合したままであることを確認します。以下のコマンドを使用し
5 ます。
- ```
5 cp db2_36.o db2.o
5 -r--r--r-- bin:bin for db2.o
```

5 元のオブジェクトにスイッチバックするには、db2\_36.o ファイルの代わりにバ  
5 ックアップ・ファイルを使用して、同じ手順に従ってください。

### 5 **Solaris** オペレーティング環境

5 必要なライブラリーを Solaris オペレーティング環境上に作成するには、以下  
5 を実行します。

- 5 1. インスタンス所有者として **db2stop force** コマンドを使用し、すべてのデ  
5 ータベース・インスタンスをシャットダウンします。
- 5 2. DB2 管理サーバー (DAS) インスタンス ID を使用し、**db2admin stop**  
5 **force** コマンドで DAS インスタンスをシャットダウンします。
- 5 3. /opt/IBMDB2/V8.1/lib ディレクトリーの元の libdb2.so.1 ファイルをバック  
5 アップします。
- 5 4. ファイル libdb2\_36.so.1 をバックアップ・ファイル libdb2.so.1 にコピ  
5 ーし、所有権および権限が整合したままであることを確認します。以下のコ  
5 マンドを使用します。
- ```
5 cp libdb2_36.so.1 libdb2.so.1  
5 -r-xr-xr-x bin:bin libdb2.so.1
```

- 5 5. データベース・インスタンスごとに、**db2iupdt <instance>** コマンドを発
5 行し、DAS インスタンスに **dasiupdt <das_instance>** コマンドを発行し
5 ます。

5 元のオブジェクトにスイッチバックするには、libdb2_36.so.1 ファイルの代わり
5 にバックアップ・ファイルを使用して、同じ手順に従ってください。

5 **HP-UX**

5 必要なライブラリーを HP-UX 上に作成するには、以下を実行します。

- 5 1. **db2stop force** コマンドを使用して、すべてのデータベース・インスタン
5 スをシャットダウンします。
- 5 2. **db2admin stop force** コマンドを使用して、DB2 管理サーバー (DAS) イン
5 スタンスをシャットダウンします。
- 5 3. /opt/IBMDB2/V8.1/lib ディレクトリーの元の libdb2.s1 ファイルをバック
5 アップします。

- 5 4. ファイル libdb2_36.s1 をバックアップ・ファイル libdb2.s1 にコピーし
5 て、所有権と許可が整合したままであることを確認します。次のコマンドを
5 使用して整合性を確認します。
- ```
5 cp libdb2_36.s1 libdb2.s1
5 -r-xr-xr-x bin:bin for libdb2.s1
```
- 5 5. データベース・インスタンスごとに、**db2iupdt <instance>** コマンドを発  
5 行し、DAS インスタンスに **dasiupdt <das\_instance>** コマンドを発行し  
5 ます。

5 元のオブジェクトにスイッチバックするには、libdb2\_36.s1 ファイルの代わりに  
5 バックアップ・ファイルを使用して、同じ手順に従ってください。

### 5 その他の UNIX オペレーティング・システム

5 他の UNIX オペレーティング・システム上の DB2 および Merant Driver  
5 Manager に関して援助が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

## 64 ビット・オペレーティング・システムに必要な Microsoft XP のフィクス

Microsoft XP オペレーティング・システム (2600) を使用していて、DB2 ファミリー製  
品で NETBIOS プロトコルを使用するように構成されている場合、Microsoft からホッ  
ト・フィックスを入手する必要があります。知識ベース 項目番号 Q317437 について、  
Microsoft に問い合わせてください。

## MVS オペレーティング・システムの非サポート

ドキュメンテーションの記述にかかわらず、MVS™ オペレーティング・システムは、  
DB2 Universal Database でサポートされなくなりました。MVS は z/OS にとって代わ  
られました。

## 3 バージョン 8 における SNA サポート制限

3 以下のサポートは、DB2 Universal Database Enterprise Server Edition (ESE) (Windows  
3 および UNIX ベースのオペレーティング・システム版) バージョン 8、および DB2  
3 Connect Enterprise Edition (CEE) (Windows および UNIX ベースのオペレーティング・  
3 システム版) バージョン 8 から撤回されました。

- 3 • SNA を使用したマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) 機能は使用できません。  
3 マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) が必要なアプリケーションは、TCP/IP 接  
3 続を使用する必要があります。ホストまたは iSeries™ データベース・サーバーへの  
3 TCP/IP 接続を使用したマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) は、一部のリリー  
3 スでは使用できます。マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) が必要なホストま  
3 たは iSeries アプリケーションでは、DB2 Universal Database ESE バージョン 8 内  
3 の TCP/IP マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) の新機能を使用できます。



- DB2 Universal Database ESE または DB2 CEE サーバーは、SNA を使用したクライアント接続をサポートしなくなりました。バージョン 8 フィックスバック 1 以降の DB2 Universal Database では、32 ビット・バージョンの AIX、Solaris™ オペレーティング環境、HP-UX、および Windows ベースのアプリケーションは、SNA を使用してホスト・ベースまたは iSeries ベースのデータベース・サーバーにアクセスできます。これによりアプリケーションは、SNA を使用してホストまたは iSeries データベースにアクセスできますが、1 フェーズ・コミットのみを使用になります。
- DB2 Universal Database for z/OS™ でのシスプレックスのサポートは、TCP/IP を使用する場合のみ利用可能です。シスプレックスは、SNA を使用した接続ではサポートされません。
- パスワードの変更は、ホスト・データベース・サーバーへの SNA を使用した接続ではサポートされません。
- SNA はすべて、次のバージョンの DB2 Universal Database および DB2 Connect ではサポートされなくなります。

## サポートされている LDAP クライアントおよびサーバーの構成

次の表では、サポートされる LDAP クライアント構成と LDAP サーバー構成を要約しています。

表 3. サポートされている LDAP クライアントおよびサーバーの構成

|                            | IBM SecureWay Directory | Microsoft Active Directory | Netscape LDAP サーバー |
|----------------------------|-------------------------|----------------------------|--------------------|
| IBM LDAP クライアント            | サポートされる                 | サポートされる                    | サポートされる            |
| Microsoft LDAP/ADSI クライアント | サポートされる                 | サポートされる                    | サポートされる            |

IBM SecureWay Directory バージョン 3.1 は、Windows NT、Windows 2000、Windows 2003、AIX、および Solaris で使用可能な LDAP バージョン 3 サーバーです。

SecureWay Directory は、AIX および iSeries (AS/400) での基本オペレーティング・システムの一部として、また OS/390 Security Server と共に出荷されます。

DB2 は、IBM LDAP クライアントを AIX、Solaris、Windows 98、Windows XP、Windows NT、Windows 2000、および Windows 2003 でサポートしています。

DB2 は、Linux IA32 および Linux/390 上の IBM LDAP バージョン 3.2.2 をサポートします。

Microsoft Active Directory は LDAP バージョン 3 サーバーです。Windows 2000 Server オペレーティング・システムの一部として使用できます。

4 Microsoft LDAP クライアントは、Windows オペレーティング・システムに組み込まれ  
4 ています。

4 Windows オペレーティング・システムで実行されている場合、DB2 は IBM  
4 SecureWay Directory Server へのアクセス手段として、IBM LDAP クライアントまたは  
4 Microsoft LDAP クライアントの使用をサポートします。IBM LDAP クライアントを明  
4 示的に選択するには、**db2set** コマンドを使用して **DB2LDAP\_CLIENT\_PROVIDER** レ  
4 ジストリー変数を IBM に設定します。

## 4 Linux (AMD64) 用の Tivoli Storage Manager

4 Tivoli Storage Manager サポートが AMD Opteron 64 ビット・システム上の Linux で使  
4 用可能になりました。TSM クライアント API の最低の必須レベルは TSM 5.2.0 で  
4 す。

## 5 Linux (AMD64) でのツール・カタログ・データベース作成の非サポート

5 バージョン 8.1.4 では、Linux (AMD64) での 64 ビット以下の DB2 インスタンスのツ  
5 ール・カタログ・データベース作成はサポートされません。したがって、DB2 のインス  
5 トール中、**db2isetup** を用いる 64 ビット・インスタンスの更新中、またはインストール  
5 後に **CREATE TOOLS CATALOG CLP** コマンドを用いる場合は、64 ビット以下の  
5 インスタンスのツール・カタログは作成できません。バージョン 8.1.4 では、Linux  
5 (AMD64) での 32 ビット以下のインスタンスのツール・カタログ・データベースの作成  
5 はサポートされます。

## 5 AIX、Solaris、および HP-UX でのツール・カタログ・データベース作成の非 5 サポート

5 DB2 UDB の以下のリリースでは、ハイブリッド 64 ビット・プラットフォームの 64  
5 ビットのインスタンスに対する DB2 のインストール中のツール・カタログ作成はサポ  
5 ートされません。

- 5 • DB2 UDB バージョン 8.1
- 5 • DB2 UDB バージョン 8.1 フィックスパック 1
- 5 • DB2 UDB バージョン 8.1.2
- 5 • DB2 UDB バージョン 8.1 フィックスパック 3
- 5 • DB2 UDB バージョン 8.1.4

5 ハイブリッド・プラットフォームには、以下のものがあります。

- 5 • AIX
- 5 • Solaris オペレーティング環境
- 5 • HP-UX
- 5 • 32 ビット・インスタンスと 64 ビット・インスタンスの両方をサポートするその他  
5 のプラットフォーム

5 64 ビット・インスタンスに対してツール・カタログを作成する場合、DB2 のインスト  
5 ール後に、**CREATE TOOLS CATALOG CLP** コマンドを使用する Command Line  
5 Processor、またはコントロール・センターを使用することで作成できます。また、この  
5 操作には、64 ビットの IBM Developer Kit for Java をインストールする必要があります  
5 ます。詳細については「DB2 管理ガイド」の『DB2 管理サーバー』セクションを参照し  
5 てください。

## Windows XP オペレーティング・システム

2 Windows XP Home Edition オペレーティング・システムは、Personal Edition 製品のみ  
2 でサポートされています。

以下の製品は、Windows XP Professional オペレーティング・システムをサポートしてい  
ます。

- 2 • Personal Edition
- 2 • Workgroup Server Edition
- 5 • DB2 Connect Personal Edition
- 5 • DB2 Connect Enterprise Edition

5 **注:** DB2 Connect Enterprise Edition は、開発またはテスト目的でのみ Windows XP  
5 でサポートされます。実稼働環境には Windows 2000 または Windows Server  
5 2003 が必要です。

## Workgroup Server 64 ビット・インスタンス制約事項

5 DB2 UDB Workgroup Server Edition および DB2 UDB Workgroup Server Unlimited  
5 Edition は、64 ビット・サーバー・インスタンス用のライセンスが交付されていま  
5 せん。これらの製品については、次のものを作成できます。

- 5 • 32 ビット・サーバー・インスタンス
- 5 • 32 ビットまたは 64 ビット・クライアント・インスタンス

---

## アプリケーション開発

### AIX 4.3.3 および AIX 5.1 以降用の DB2 には AIX C++ バージョン 6 のラ ンタイムが必要

5 AIX バージョン 4.3.3 および AIX バージョン 5.1 以降用の DB2 バージョン 8.1.4 を  
5 使用する場合には、AIX C++ バージョン 6 のランタイム・ライブラリーが、ご使用の  
5 AIX システム上にインストールされている必要があります。このアップデートは、次の  
5 サイトから March 2003 C++ Runtime PTF として入手できます。

5 [http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?rs=0&q=xIC.rte&uid=swg24004427&loc=en\\_US&cs=utf-8&cc=us&lang=en](http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?rs=0&q=xIC.rte&uid=swg24004427&loc=en_US&cs=utf-8&cc=us&lang=en)

5 DB2 バージョン 8.1.4 を使用する前に、このサイトに記載されているインストールの説  
5 明に従ってください。

## CLI の非同期実行

CLI の非同期実行は使用できません。

## 2 Windows 64 ビット・オペレーティング・システム上の CLI および ODBC

2 ODBC と DB2 CLI の混在したアプリケーションは、Windows 64 ビット・オペレーテ  
2 ィング・システムでは使用できません。

## 5 SQL ルーチン・コンパイル・コマンド 用 DB2 パス (Windows)

5 通常、DB2\_SQLROUTINE\_COMPILE\_COMMAND を設定する必要はありません。ただ  
5 し、これが Windows で設定されている場合、変数 %DB2PATH% の値であるデフォル  
5 ト・パス「C:\Program Files\IBM\SQLLIB」の「Program」と「Files」の間にスペースが  
5 あることが原因で、問題が発生する可能性があります。この問題は、コマンド値全体が  
5 引用符で囲まれている場合でも発生する可能性があります。

5 %DB2PATH% 値に短形を使用することが、この問題の対処法です。デフォルトの場  
5 合、「C:\PROGRA~1\IBM\SQLLIB」となります。DB2 がインストールされているパス  
5 の短形を %DB2PATH% に設定し、

```
5 set db2path=C:\PROGRA~1\IBM\SQLLIB
```

5 デフォルト値を使用して DB2\_SQLROUTINE\_COMPILE\_COMMAND を実行できます。

```
5 db2set DB2_SQLROUTINE_COMPILE_COMMAND="c1 -0x -w2 -TC -D_X86_=1 -MD
5 -I%DB2PATH%\include SQLROUTINE_FILENAME.c /link -dll
5 -def:SQLROUTINE_FILENAME.def /out:SQLROUTINE_FILENAME.dll
5 %DB2PATH%\lib\db2api.lib"
```

5 あるいは、%DB2PATH% のパス値の短形を置き換えることにより、コマンド自体の値  
5 を変更できます。

```
5 db2set DB2_SQLROUTINE_COMPILE_COMMAND="c1 -0x -w2 -TC -D_X86_=1 -MD
5 -IC:\PROGRA~1\IBM\SQLLIB\include SQLROUTINE_FILENAME.c /link -dll
5 -def:SQLROUTINE_FILENAME.def /out:SQLROUTINE_FILENAME.dll
5 C:\PROGRA~1\IBM\SQLLIB\lib\db2api.lib"
```

5 実際には、DB2 がインストールされたパスを使用してください。例えば、DB2 が D:  
5 ドライブの同一パスにインストールされている場合は、  
5 「D:\PROGRA~1\IBM\SQLLIB」という設定になります。

## 5 Linux 上の Java 共用ライブラリーへのアクセス

5 Java ストアード・プロシージャまたはユーザー定義関数を実行するためには、Linux  
5 ランタイム・リンカーが特定の Java 共用ライブラリーにアクセス可能である必要があ  
5 ります。また、DB2 が Java 仮想マシンと同様、それらのライブラリーをロードできる

5 必要があります。このロードを実行するプログラムは `setuid` 権限で実行されるため、`/usr/lib` 内の従属ライブラリーのみが検索されます。

5 `/usr/lib` に、Java 共用ライブラリーへのシンボリック・リンクを作成してください。  
5 IBM JDK 1.3 では、`libjava.so`、`libjvm.so`、および `libhpi.so` へのシンボリック・リンクが必要です。シンボリック・リンクを作成するには、`root` として次のコマンドを実行します。

```
5 cd /usr/lib
5 ln -fs JAVAHOME/jre/bin/libjava.so .
5 ln -fs JAVAHOME/jre/bin/classic/libjvm.so .
5 ln -fs JAVAHOME/jre/bin/libhpi.so .
```

5 ここで、`JAVAHOME` は JDK のベース・ディレクトリーを示します。DB2 がこれらのライブラリーを検出できない場合は、Java ルーチンの試行時に -4301 エラーが通知され、ライブラリーが検出できなかったことを示すメッセージが管理通知ログに記録されます。

5 注: `/usr/lib` にリンクを作成する代わりに、`/etc/ld.so.conf` に Java 共用ライブラリーの場所を追加しないでください。この方法は無効であり、ルーチン呼び出しが正常に実行されなくなります。

---

## 5 構成アシスタント

### サポートされない BIND オプション

構成アシスタントは、以下の BIND オプションをサポートしません。

- CALL RESOLUTION
- CLIPKG
- CNULREQD
- DBPROTOCOL
- ENCODING
- MESSAGES
- OPTHINT
- OS400NAMING
- GENERIC
- IMMEDIATE
- KEEP DYNAMIC
- PATH
- SORTSEQ
- TRANSFORM\_GROUP

- VALIDATE
- VARS

---

## 構成パラメーター

### 2 複数パーティション・データベースにおける NUM\_LOG\_SPAN 構成パラメーター

2 NUM\_LOG\_SPAN は、トランザクションの対象となるログ・ファイルの最大数を指定し  
2 ます。いつでも、NUM\_LOG\_SPAN 設定に違反したトランザクションはロールバックさ  
2 れて、原因となったアプリケーションをデータベースから強制的に排除します。

2 ただし複数パーティション・システムにおいては、db2loggr プロセスがアプリケーション  
2 を強制排除できるのは、アプリケーションの調整ノードと、エラーを検出する  
2 db2loggr プロセスのノードが同じ場合のみです。例えば、3 つのノード (0、1、および  
2 2) があるシステムの場合に、すべてのノードで NUM\_LOG\_SPAN パラメーターを 2  
2 に設定したと想定します。この場合、アプリケーションはデータベースのノード 2 に接  
2 続してから、長時間実行トランザクションを開始しますが、2 つのログ・ファイルを超  
2 えてスパンします。ノード 1 上の db2loggr プロセスがそのエラーを最初に検出して  
2 も、何も発生しません。しかし同じ違反がノード 2 でも発生すると、db2loggr プロセ  
2 スによってそのエラーが検出され、トランザクションはロールバックされてアプリケー  
2 ションは強制的に排除されます。

---

## コマンド・センター

### 5 コマンド・センターおよびバージョン 7 サーバー

5 バージョン 8 のコマンド・センターでは、「データベース接続 (Database connection)」  
5 フィールドに関連付けられた [...] (ブラウズ) ボタンをクリックすると、警告メッセージ  
5 とダンプ・ファイルが生成される場合があります。この動作は、バージョン 7 サーバー  
5 と連動するバージョン 8 ツールの制限や制約事項と関係しています。 [...] をクリック  
5 すると、「データベースの選択 (Select Database)」ウィンドウが開きます。このウィン  
5 ドウに表示されるシステムやインスタンスを拡張すると、DB2 は内部アクションを生成  
5 してシステム、インスタンス、およびデータベースの情報を抽出し、ツリーにデータを  
5 追加します。これらの内部アクティビティー中にバージョン 7 サーバーを検出すると、  
5 DB2 は警告とダンプ・ファイルを生成します。

## 複数のフィックスパック環境での **dasdrop** の制約事項

代替フィックスパックでは、それぞれのバージョンの **dasdrop** コマンドがインストールされます。このコマンドは、AIX では `/usr/opt/db2_08_FPn/` パスにインストールされます。他の UNIX システムでは、このコマンドは `/opt/IBM/db2/V8.FPn/` パスにインストールされます。どちらの場合も、*n* はフィックスパックの番号です。

複数フィックスパックの環境でセットアップできる DAS は常に 1 つだけです。バージョン 8.1 の製品に対して、または任意の代替フィックスパックに対して、DAS を作成できます。バージョン 8.1 の製品に対して作成された DAS をドロップする場合は、任意のバージョンの **dasdrop** を使用して DAS をドロップできます。しかし、代替フィックスパックに対して作成された DAS をドロップする場合は、代替フィックスパックのバージョンの **dasdrop** を使用する必要があります。

例えば、AIX オペレーティング・システム上での次のシナリオを考えてみます。

- DB2 Universal Database バージョン 8.1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 をインストールする。
- バージョン 8.1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成する。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dascrt dasusr1
```

- DAS をドロップする。

この DAS は、次のいずれのコマンドを使用してもドロップできます。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dasdrop
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

いずれも正しく機能します。

しかし、次の例では異なります。

- DB2 Universal Database バージョン 8.1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成する。

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dascrt dasusr1
```

- この DAS をドロップする。

この場合は次のように、代替フィックスパック 1 の **dasdrop** コマンドを使用する必要があります。

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

バージョン 8.1 の **dasdrop** コマンドを使用すると、エラーになります。

この制限が適用されるのはバージョン 8.1 の製品に対してのみであり、通常フィックスパックには適用されません。例えば、次のようにします。

- DB2 Universal Database バージョン 8.1 をインストールする。
- 通常フィックスパック 1 を適用する。これによりバージョン 8.1 の **dasdrop** に関連する問題が訂正されます。
- 代替フィックスパック 1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成する。  
`/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dascrt dasusr1`
- この DAS をドロップする。

この DAS は、次のいずれのコマンドを使用してもドロップできます。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dasdrop
```

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

`/usr/opt/db2_08_01/` パス内のバージョンの `dasdrop` は、通常フィックスパックを適用した時点で訂正されているため、いずれも正しく機能します。

---

## データウェアハウス・センター

### ERwin 4.x メタデータ・ブリッジ

ERwin 4.0 メタデータは、Linux オペレーティング・システムにインポートできません。

ERwin 4.x ブリッジは、以下の制限付きで Windows 98 および WinME でサポートされます。

- DB2 コマンド行プロセッサからのみ **db2erwinimport** コマンドを実行できる。
- `-x` および `-t` パラメーターでは XML およびトレース・ファイルの名前を完全修飾する必要がある。

### リモート・オブジェクトの日本語名

日本語のリモート・ソースのスキーマ、表、および列名内では、使用できない文字があります。Unicode マッピングの差が原因で、名前が NULL になる場合があります。詳細については、<http://www.ingrid.org/java/i18n/encoding/ja-conv.html> を参照してください。

### Clean Data トランスフォーマーの制約事項

リンクの制約事項:

表またはビューなどの OS/390 データ・リソースは、新規の Clean Data ステップにリンクできません。OS/390 データ・リソースを、使用すべきでないプログラム Clean Data ステップにリンクすることはできません。



### パラメーターの制約事項:

「Find and Replace」パラメーター: 新規の Clean Data トランスフォーマー・ルール表に Find and Replace 列の異なるデータ・タイプが入っている場合、トランスフォーマーをテスト・モードにプロモートする前に、Target 列データ・タイプを Target Table プロパティー・ページおよび Column Mapping ページの両方で変更する必要があります。

「Discretize」パラメーター: 新規の Clean Data ルール表に Bounds and Replace 列の異なるデータ・タイプが入っている場合、トランスフォーマーをテスト・モードにプロモートする前に、Target 列データ・タイプを Target Table プロパティー・ページおよび Column Mapping ページの両方で変更する必要があります。

### iSeries プラットフォームの制約事項:

iSeries プラットフォームでは、新規の Clean Data トランスフォーマーはエラー処理を行いません。合致タイプ「すべて合致」は、iSeries プラットフォーム上でのみ生成できます。

## レプリケーション用のウェアハウス・エージェントの使用および Client Connect ウェアハウス・ソースへのアクセス

### レプリケーション用にウェアハウス・エージェントを使用する

ソース、ターゲット、キャプチャー・コントロール、またはアプライ・コントロール・サーバー (データベース) がクライアント・システムに対してリモートにある場合、データベースは、クライアントおよびウェアハウス・エージェント・システムの両方で、同じ名前、ユーザー ID、およびパスワードを使用してカタログされる必要があります。クライアントとウェアハウス・エージェントの両方のシステムでソースをカタログした後、ソース、ターゲット、キャプチャー、およびアプライ・データベースに接続可能なことを確認してください。

ウェアハウス・ソース、ウェアハウス・ターゲット、レプリケーション・キャプチャー、またはレプリケーション・アプライ・データベースに接続できない場合は、リモート・システムの環境変数 DB2COMM が TCP/IP に設定されていること、またポート番号が、クライアント・システムでカタログされたノードのポート番号と一致することを確認してください。

リモート・システムのポート番号を確認するには、以下のコマンドを DB2 Universal Database コマンド・プロンプトで入力します。

```
get dbm cfg | grep SVCENAME
```

ノードをカタログする際に、クライアント・システムのポート番号を指定します。

ウェアハウス・エージェントを使用して **Client Connect** ウェアハウス・ソースにアクセスする

Client Connect を使用して、ウェアハウス・エージェントで定義されたウェアハウス・ソースにアクセスする場合、ソースはクライアント・システムおよびウェアハウス・エージェント・システムの両方で、同じ名前、ユーザー ID、およびパスワードでカタログされる必要があります。ODBC バージョンのウェアハウス・エージェントを使用している場合は、ウェアハウス・エージェント・サイトおよびクライアント・サイトの両方で、ソースを ODBC ソースとしてカタログする必要があります。カタログしないと、ウェアハウス・エージェントからのウェアハウス・ソースへのアクセスを必要とするアクションは失敗します。

## インターバルを設けられたウェアハウス・プロセスの実行のスケジューリング

ウェアハウス・プロセスを一定の時間間隔で実行しようスケジュールする場合は、プロセスのすべての実動ステップに必要な最長の時間を判別し、そのインターバルを適宜にスケジュールする必要があります。スケジュールされた時間間隔をプロセスが超過した場合は、後続のスケジュール済みのプロセスはすべて実行されず、またスケジュール変更されることもありません。

## iSeries システムでのレプリケーション・センターの制約事項

### IASP における管理用タスク:

レプリケーション・センターの使用中に、iSeries システムでは IASP で管理用タスクは実行できません。

### iSeries コントロール、ソース、およびターゲット・サーバーを使用するレプリケーション・ステップでの制約事項:

iSeries コントロール、ソース、およびターゲット・サーバーは、DB2 Universal Database Enterprise Server Edition のみでサポートされます。

2 デフォルトとリモートのどちらのエージェントの場合も、ローカル・マシン上で iSeries  
2 サーバーをカタログする必要があります。リモート・エージェントの場合は、エージェ  
2 ントが置かれているマシン上でも iSeries サーバーをカタログする必要があります。ソ  
2 ースまたはターゲット・サーバーが iSeries オペレーティング・システム上にある場  
2 合、ソースまたはターゲットのノートブックのデータベース・ページにシステム名を指  
2 定する必要があります。

## インポートとエクスポートの制限

3 リンク解除されたショートカットのプロセスをエクスポートし、.tag ファイルとして他  
3 のコントロール・データベースにインポートした場合、リンク解除されたショートカ  
3 ット・データは次の DWC3142 エラーを引き起こします。

3 <dirID> was not found in the Data Warehouse Center control database.

3 このエラーは、リンク解除されたショートカット dirID が変換されず、元のコントロール・データベースを参照したときに表示されます。

## 4 **Visual Warehouse 5.2 DB2 プログラム「DB2 UDB EEE へのフラット・フ** 4 **ァイルの VW 5.2 ロード (AIX のみ)」はサポートされていない**

4 Visual Warehouse 5.2 DB2 EEE ロード・ステップは、DB2 バージョン 8 ではサポート  
4 されていません。区切り付きファイルをバージョン 8 のパーティションに分割された表  
4 にロードするためには、以下のステップを実行してください。

- 4 1. ターゲット・データベースまたはターゲット表を DB2 バージョン 8 に移行します  
4 (まだ DB2 バージョン 8 になっていない場合)。データベースを移行する一つの方  
4 法としては、コマンド行から **db2move** コマンドを実行します。
- 4 2. Visual Warehouse 5.2 EEE ロード・ステップのプロパティ・ウィンドウで、「パ  
4 ラメーター (Parameters)」タブを選択し、「列区切り文字 (Column  
4 **delimiter)**」、「ストリング区切り文字 (String delimiter)」、および「小数点区  
4 切り文字 (Decimal delimiter)」パラメーターをメモします。
- 4 3. 新しいロード・ステップのための新規プロセスを作成するか、またはオリジナルの  
4 プロセスを使用します。新規プロセスを作成する予定の場合は、ソース・ファイル  
4 とターゲット表を新規プロセスに追加します。また、新規プロセスを適切なウェア  
4 ハウス・セキュリティー・グループに追加します。
- 4 4. ご使用のプロセス内に DB2 ロード・ステップを作成します。
- 4 5. ソースとターゲットをステップに接続します。
- 4 6. ロード・ステップのプロパティ・ウィンドウを開き、「ロード・モード (Load  
4 **mode)**」フィールドで PARTITIONED を選択します。必要な場合、「列  
4 (Column)」、「文字ストリング (Character strings)」、および「小数点  
4 (Decimal point)」の各フィールドを、旧ステップの「列区切り文字 (Column  
4 **delimiter)**」、「ストリング区切り文字 (String delimiter)」、および「小数点区切  
4 り文字 (Decimal delimiter)」で使用していた値に更新します。
- 4 7. 「進む (Advanced)」をクリックして、ロード・ウィザードを開始します。「操作  
4 (Operation)」ページから、「データの分割とロード (Split and load data)」を選択  
4 します。
- 4 8. 「タイプ (Type)」ページから、「表データの置換 (Replace table data)」を選択  
4 します。
- 4 9. ロード・ウィザードの残りのデフォルト値を受け入れます。
- 4 10. サマリー・ページに、最終的なロード・コマンドが表示されます。最終的なロー  
4 ド・コマンドを検討して「完了」をクリックします。
- 4 11. プロパティ・ウィンドウを閉じます。

## CURSOR ロードの限定的なサポート

DB2 UDB ロード・ステップでは、ビューまたは表をステップへのソースとして使用できるようになりました。その結果が LOAD FROM CURSOR です。

CURSOR ロード用のウィザードで列をマップするために、「入力ファイルで検出される列位置に基づいて列をマップする (Map columns based on column positions found in the input file)」ラジオ・ボタンを選択しておく必要があります。

---

## DB2 Cube Views

### Cube Views サンプル・アプリケーションはサンプル・ソースと異なっている

DB2 Cube Views V8.1 は、db2mdapiclient.exe というサンプル・アプリケーションを提供しています。これは Cube Views のいくつかの重要な機能を例示するものです。このアプリケーションのソース・コードである db2mdapiclient.cpp が組み込まれています。初期リリースの DB2 Cube Views V8.1 では、アプリケーションはこのソース・コードを使って構築されました。バージョン 8.1.4 でソース・コードは変更されていませんが、アプリケーションは変更されています。ソース・コードは依然として有効ですが、アプリケーションと厳密には一致しません。

---

## DB2 Data Links Manager

### データ・リンク・サーバーのバックアップは、Tivoli Storage Manager アーカイブ・サーバー (AIX、Solaris オペレーティング環境) を使用しない

**問題:** DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 のインストールまたはこのバージョンへの移行の際、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) で開始された Tivoli® Storage Manager アーカイブ・サーバーへのデータ・リンク・サーバー・データのバックアップができない。以下のエラー・メッセージのいずれかが画面に表示されるか、インストール状況のレポートに書き出されます。

DLFM129I: DLFM\_DB の自動バックアップが起動されました。  
バックアップ完了までお待ちください。

DLFM901E: システム・エラーが発生しました。戻りコード = "-2062"。  
現在のコマンドは処理できませんでした。  
追加情報については、db2diag.log ファイルを参照してください。

— または —

DLFM811E: 現行 DLFM データベースをバックアップすることができませんでした。  
SQL コード = "-2062", 戻りコード = "-2062"

DLFM901E: システム・エラーが発生しました。戻りコード = "-2062"。  
現在のコマンドは処理できませんでした。  
追加情報については、db2diag.log ファイルを参照してください。

**原因:** DB2 Data Links Manager インストーラー・プログラムが、Tivoli Storage Manager を、データ・リンクのサーバーに対するアーカイブ (バックアップ) サーバーとして使用するために必要な変数を設定できませんでした。

**ヒント:** Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する予定の場合に、DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 のインストールまたはこのバージョンへの移行がまだ完了していなければ、この問題を回避できます。まず、インストーラー・プログラムでは Tivoli Storage Manager バックアップ・オプションを使用しないでください。次に、下記のステップ 2 に記述しているように、Data Links Manager の管理者プロファイルを手動で構成し、該当する Tivoli Storage Manager の変数を組み込んでください。これら両方のタスクを完了したら、インストールあるいは移行を続行できます。

**対処策:** 次のタスクをリストの順に実行します。

1. 次のコマンドで DLFM データベースをバックアップします。

```
db2 backup <d1fm_db><path>
```

- <d1fm\_db> は DLFM データベースの名前です。デフォルトでは、データベースは DLFM\_DB という名前です。
- <path> は選択項目のバックアップ・ストレージ・ロケーションへのディレクトリー・パスです。

2. Data Links Manager の管理者プロファイルを手動で構成し、該当する Tivoli Storage Manager の変数を組み込んでください。手動構成の手順および必要な変数は、次のドキュメンテーションのトピックで説明されています。

- Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する (AIX)
- Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する (Solaris オペレーティング環境)

これらのトピックについては、オンラインの DB2 インフォメーション・センターまたは「DB2 Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」の『システム管理 オプション』の章で確認できます。

- DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 の新規インストールを完了している場合は、これで終わりです。
- DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 に移行する場合は、移行ユーティリティー・プログラム **db2dlmmg** を再実行します。

---

## DB2 Universal Database のバックアップとリストア

### Linux 390 オペレーティング・システム上のバックアップおよびリストア

Linux 390 オペレーティング・システムを使用する場合、複数の磁気テープ装置との間のバックアップおよびリストア操作が機能しないことがあります。

### 二重引用符で囲まれたストアード・プロシージャのデバッグ

IBM DB2 Universal Database デベロップメント・センター 8.1.4 とそれ以前のすべてのリリースでは、ストアード・プロシージャ名、スキーマ、または特定の名前における二重引用符 (") で囲まれたストアード・プロシージャのデバッグをサポートしていません。

### SQLFLAG(STD) プリコンパイラー・オプション・エラー

デベロップメント・センターを使用して DB2 for z/OS, Version 8 で実行する SQL ストアード・プロシージャを作成するときには、SQLFLAG (STD) プリコンパイル・オプションを外してください。SQLFLAG(STD) プリコンパイル・オプションを使用可能にしておくこと、「Abend C6 occurred while running Precompile program DSNHPC」というエラーが生じます。

---

## ドキュメンテーション

### DB2 レプリケーションのガイドおよびリファレンスのドキュメンテーション

<http://www.ibm.com/software/data/dbtools/datarepl.htm> のソリューション情報は、利用できなくなりました。この情報は、「レプリケーションのガイドおよびリファレンス」のまえがきで言及されています。

### DB2 Universal Database バージョン 8 HTML ドキュメンテーション・インストールの制約事項 (Windows)

Windows では、DB2 Universal Database バージョン 7 (またはそれ以前のバージョン) がインストール済みのワークステーションまたはサーバーには、DB2 Universal Database バージョン 8 の HTML ドキュメンテーションをインストールしないでください。インストーラーが以前のバージョンを検出し、以前の製品を除去します。

対処法が存在します。前のバージョンの DB2 Universal Database がインストールされているワークステーションに、DB2 Universal Database バージョン 8 HTML ドキュメンテーションをインストールする必要がある場合は、インストーラーを使用しないで、DB2 Universal Database バージョン 8 HTML ドキュメンテーション CD から、手動でファイルおよびディレクトリーをコピーできます。DB2 インフォメーション・センターおよび全テキスト検索が使用できますが、HTML ドキュメンテーション・フィックスパックを適用することはできません。

## ドキュメンテーションの全カテゴリーをインストールしていない場合の AIX におけるドキュメンテーション検索の障害

DB2 HTML ドキュメンテーション CD に含まれているすべてのカテゴリーのドキュメンテーションをインストールしていない場合に、「すべてのトピック (All topics)」での検索を行うと失敗し、ブラウザの Java コンソールに `InvalidParameterException` が報告されて検索結果が表示されない場合があります。

ドキュメンテーション検索の問題に対処するには、以下のいずれかを実行してください。

- 「検索 (Search)」ウィンドウの「検索範囲 (Search scope)」リスト・ボックスで選択して、検索の範囲を狭くする。
- DB2 HTML ドキュメンテーションの CD からすべてのドキュメンテーション・カテゴリーをインストールする。

## Java 2 JRE1.4.0 でのドキュメンテーション検索の問題

ブラウザが Java 2 JRE V1.4.0 を使用している場合に、スペースの入ったパス (例 `C:\Program Files\SQLLIB\doc\`) にドキュメンテーションがインストールされていると、ドキュメンテーション検索アプレットが失敗し、ブラウザの Java コンソールに `InvalidParameterException` が報告されて検索結果が表示されない場合があります。この問題は、JRE V1.4.1 では修正されています。

ドキュメンテーション検索の問題に対処するには、以下のいずれかを実行してください。

- ブラウザーの JRE のバージョンを 1.4.1 (<http://java.sun.com/j2se/1.4.1/download.html> から入手可能) にアップグレードする。
- ブラウザーの JRE のバージョンを 1.3.x (<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/ad/v8/java/> から入手可能) にダウングレードする。

## インストール時のオプションにない言語での DB2 インフォメーション・センターのインストール

DB2 のセットアップ・ウィザードでは、DB2 製品をインストールする言語の DB2 HTML ドキュメンテーションのみインストールできます。つまり、以下の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 HTML ドキュメンテーションをインストールすることはできません。

- ポルトガル語 (UNIX の場合のみの制約事項)
- デンマーク語、フィンランド語、ノルウェー語、スウェーデン語 (Linux の場合のみの制約事項)
- オランダ語、トルコ語 (HP-UX、Solaris、Linux のみの場合の制約事項)
- アラビア語 (UNIX の場合のみの制約事項)

上記の言語に DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、次のようにします。

1. *DB2 HTML* ドキュメンテーション *CD* を *CD-ROM* ドライブに挿入します。
2. 以下のディレクトリーをご使用のコンピューターにコピーします。
  - `/cdrom/program files/IBM/SQLLIB/doc/htmlcd/language`

`cdrom` は *CD* をマウントしているロケーション、`language` は使用する言語のコードです。

フォルダーはどこに置いてもかまいません。 *DB2 HTML* ドキュメンテーションは、*CD* から直接表示することもできます。この方法については、*DB2* バージョン 8 マニュアルの付録の『*DB2 HTML* ドキュメンテーション *CD* から直接オンライン技術情報を表示』のトピックを参照してください。

#### 注:

1. ドキュメンテーションを表示するには、Microsoft Internet Explorer 5.0 以上、または Netscape 6.1 以上のブラウザを使用する必要があります。
2. 同様に、ドキュメンテーションを製品から立ち上げると、手動でコピーしたドキュメンテーションではなく、製品のインストールの一部としてインストールされたドキュメンテーションになります。

## ホスト・システムでの使用時の DB2 Universal Database for Linux の正式名称

ホスト・システムでの *DB2 Universal Database for Linux* の正式名称は、*DB2 on Linux for S/390® and zSeries™* です。 *S/390* は 32 ビットであることを示し、*zSeries* は 64 ビットであることを示します。また、次の用語も廃止されていますので注意してください。

- 64 ビット *Linux/390*
- *Linux/SGI*

---

## GUI ツール

### コントロール・センターのプラグインのサポート

現在、コントロール・センターはカスタム・フォルダーをサポートしています。カスタム・フォルダーには、ユーザー選択のシステムまたはデータベース・オブジェクトを格納できます。カスタム・フォルダー専用のコントロール・センター・プラグインは作成できませんが、カスタム・フォルダーに格納されるオブジェクトのプラグインは作成できます。コントロール・センター・プラグインの詳細は、「Introducing the plug-in architecture for the Control Center」のトピックを参照してください。



## DB2 GUI ツールでのインド語文字の表示

DB2 GUI ツールの使用中に、インド語文字の表示で問題がある場合は、必要なフォントがシステムにインストールされていない可能性があります。

DB2 Universal Database には、以下の IBM TrueType および OpenType プロポーショナル・インド語言語フォントがパッケージされています。これらのフォントは、以下のいずれかの CD の font ディレクトリーにあります。

- IBM Developer Kit, Java Technology Edition, Version 1.3.1 for AIX operating systems on 64-bit systems
- Java application development and Web administration tools supplement for DB2, Version 8.1

これらのフォントは、DB2 のみで使用されます。これらのフォントの一般または無制限の販売、または配布を行うことはできません。

表 4. DB2 Universal Database にパッケージされたインド語のフォント

| 書体                    | 重み     | フォント・ファイル名    |
|-----------------------|--------|---------------|
| Devanagari MT for IBM | Medium | devamt.ttf    |
| Devanagari MT for IBM | Bold   | devamb.ttf    |
| Tamil                 | Medium | TamilMT.ttf   |
| Tamil                 | Bold   | TamilMTB.ttf  |
| Telugu                | Medium | TeluguMT.ttf  |
| Telugu                | Bold   | TeleguMTB.ttf |

フォントのインストールおよび font.properties ファイルの変更方法についての詳細については、IBM development kit for Java のドキュメンテーションの国際化対応セクションを参照してください。

さらに、以下の Microsoft 製品が、GUI ツールで使用できるインド語フォントを含んでいます。

- Microsoft Windows 2000
- Microsoft Windows XP
- Microsoft Publisher
- Microsoft Office

## Linux オペレーティング・システムが稼働する zSeries サーバーでの GUI ツールの非サポート

DB2 セットアップ・ウィザードを除き、Linux オペレーティング・システムが稼働中の zSeries サーバーでは、GUI ツールは使用できません。クイック・ツアーなどの、インストール・ランチパッドから通常起動されるすべての項目がこの制限の対象になります。

これらのシステムで GUI ツールを使用する場合は、クライアント・システムに別のシステム構成で管理ツールをインストールし、このクライアントを使用して zSeries サーバーに接続してください。

## 列のロードおよびインポート・ページでの IXF ファイル内の DBCS 文字の非サポート

ロード・ウィザードまたはインポート・ノートブックを使用して、DBCS 文字の入った IXF 入力ファイルからのロードまたはインポートを設定すると、列ページは、ファイル内の列名を正しく表示しません。

## ロード操作の失敗時の誤った標識の表示

ロードが失敗した場合に、警告のみが (エラーではない) 返されると、タスク・センターのタスク・アイコンに緑のチェックマークが表示されます。実行したロードの成功したものを、確かめてください。

## GUI ツールの最低限の表示設定

コントロール・センターなどの GUI ツールが正常に動作するには、最低 800 x 600 dpi の画面解像度、および最低 32 色の表示パレットを使用する必要があります。

## AIX での GUI ツール使用時の SQL1224N エラー

AIX オペレーティング・システムで GUI ツールを使用すると、SQL1224N エラーが表示される場合があります。このエラーの原因は、DB2 内のメモリー処理上の問題にあります。以下の対策で、エラーを解決できます。

手順:

AIX オペレーティング・システムで SQL1224N エラーを解除するには、以下のようになります。

1. インスタンス所有者として、以下のコマンドを実行します。

```
export EXTSHM=ON
db2set DB2ENVLIST=EXTSHM
```

2. 以下のコマンドでインスタンスを再始動します。

```
db2stop
db2start
```

インスタンスが新規の環境変数設定で再始動されると、SQL1224N エラーは解除され  
ます。

---

## ヘルス・モニター

### デフォルトでのヘルス・モニターのオフ

ヘルス・モニター (HEALTH\_MON) のデータベース・マネージャー・スイッチのデフォ  
ルト値は OFF です。

### ヘルス・インディケータの制約事項

2 db2.db2\_op\_status ヘルス・インディケータが停止状態に入ると、ヘルス・モニターは  
2 このインディケータに対するアクションを実行できません。この状態の原因は、明示  
2 的な停止要求または異常終了によって、インディケータがモニターしているインスタ  
2 ンスが非アクティブになった場合などです。異常終了の後は常にインスタンスが自動的  
2 に再始動するよう設定するには、インスタンスが高可用に保たれるように障害モニター  
2 を構成する必要があります。

---

## インフォメーション・カタログ・センター

### インフォメーション・カタログ表のパーティション化禁止

2 インフォメーション・カタログ・マネージャーが使用する表は、1 つのデータベース・  
2 パーティション内に収まっている必要があります。1 つのパーティション内に表を収め  
2 る方法は多数あります。以下の手順は、そのような目的のためのアプローチの 1 つで  
2 す。

- 2 1. DB2 コマンド行プロセッサを開いて、以下のコマンドを発行します。
  - 2 a. `CREATE DATABASE PARTITION GROUP pgname ON DBPARTITIONNUM pnumber`
  - 2 b. `CREATE REGULAR TABLESPACE tsname IN DATABASE PARTITION GROUP pgname`  
2 `MANAGED BY SYSTEM USING ('cname')`

2 「スタート」->「プログラム」->「IBM DB2」->「ツールのセットアップ (Set-up  
2 tools)」->「インフォメーション・カタログ管理ウィザード (Manage Information  
2 Catalog wizard)」をクリックします。

2 「オプション (Options)」ページで、表スペース名を「表スペース (Table space)」  
2 フィールドに指定します。

### タグ言語ファイルのインポート時にログ・ファイルが生成されない

4 タグ言語ファイルをインフォメーション・カタログ・センターへインポートするとき  
4 に、インフォメーション・カタログ・センターのログ・ファイルが生成されない場合に  
4 は、以下のトラブルシューティング・ステップを実行します。

#### 4 コマンド行から **db2icmimport** を実行している場合:

- 4 • 出力ファイル (.xml、.out、.err、.log) が生成されなかった場合、コマンド行  
4 にエラーが存在する可能性があります。最初の 5 つの引き数である  
4 UserId、Password、Database、Catalog、および Tagfile が正確であることを確  
4 認します。db2icmimport を入力して構文を確認してください。これで問題  
4 が解決されない場合、-g オプションを使用することによって db2icmimport  
4 を変更して、db2javit の出力を取り込み、出力をファイルに保管します (例  
4 えば、db2javit -j:com.ibm.db2.common.icm.tag.IcmImport -w: -i:  
4 -o:"-Xmx128m -Xms32m" -g:"d:\temp\myimport.trc" . . . )。
- 4 • ログ・ファイルが生成されなかった場合、通常は構文解析エラーがありま  
4 す。.xml ファイルと .out ファイルを調べてください。可能であれば、タグ  
4 言語ファイルの先頭に ":COMMIT.CHPID(DEBUG)" コマンドを挿入しま  
4 す。このコマンドにより、デバッグ・レポート・メッセージが生成され、  
4 .xml および .out ファイルに構文解析エラーがないかどうか調べられます。
- 4 • 構文解析後、エラーが .log ファイルに示されているはずですが、デバッグ・  
4 レポートが生成される場合、詳細は .log ファイルと .out ファイルを調べて  
4 ください。
- 4 • 常に .err ファイルを調べて、実行時エラーがないかどうか確認します。

#### 4 インフォメーション・カタログ・センターの **GUI** を使用してタグ言語ファイルをイン 4 ポートする場合:

- 4 • GUI インターフェースを使用してタグ言語ファイルをインポートする場合、  
4 .out ファイルも .err ファイルも生成されません。
- 4 • .log ファイルまたは .xml ファイルが生成される場合、それらのファイルを  
4 使用してデバッグしてみてください。
- 4 • それらのファイルが生成されないか役立たない場合、コマンド行からインポ  
4 ート・プロセスを実行して、詳細を表示します。

---

## メッセージの解説

### 5 **バージョン 8.1.4 インフォメーション・センター・メッセージ・トピック**

5 DB2 インフォメーション・センターのバージョン 8.1.4 には、新規または変更されたメ  
5 ッセージ・トピックはありません。新規または変更されたメッセージ・トピックは、次  
5 の IBM Web サイトから参照できます。

5 <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help>

## ADM メッセージの更新情報

ADM5530E は警告メッセージとして分類されるべきところ、誤ってエラーとして分類されています。このメッセージは Windows ではイベント・ログに、UNIX では通知ログにエラーとして記録されます。ADM5530E は警告メッセージとして扱う必要があります。

## SQL メッセージの追加

### SQL20271W

SQL20271W The name at ordinal position "<number>" in the statement, with name "<column-or-parm-name>", was truncated.

**説明:** 該当するステートメント内の 1 つ以上の名前が切り捨てられました。切り捨てられた最初の名前は、序数位置 "<number>" と名前 "<column-or-parm-name>" により識別されます。準備済み照会の describe output を実行している場合、序数位置は照会の選択リスト列に関連します。CALL ステートメントの describe output を実行している場合、序数位置は CALL が解決されたプロシージャの OUT または INOUT パラメーターに関連します。CALL ステートメントの describe input を実行している場合、序数位置は CALL が解決されたプロシージャの IN または INOUT パラメーターに関連します。

列名またはパラメーター名が長すぎたか、コード・ページ変換後に長くなりすぎたのが原因です。

### ユーザー応答:

列名について、正式名が長い場合は、表、ビュー、またはニックネームの名前を変更して、列の名前が短くなるようにしてください。あるいは、列名が、サポートされる最大長を超えないようなコード・ページを持つクライアントを使用してください。パラメーターについて、正式名が長い場合は、プロシージャを変更して、パラメーターの名前が短くなるようにしてください。あるいは、パラメーター名が、サポートされる最大長を超えないようなコード・ページを持つクライアントを使用してください。

sqlcode: +20271

sqlstate: 01665

## DBI メッセージの更新情報

### DBI1060E 無効なパッケージ名 <"pkg-name">

**説明:** 不正確な名前が入力されました。該当するパッケージが存在しないか、入力された名前が不正確です。

5 ユーザー応答:

5 該当パッケージの名前が配布メディアに存在するか確認してください。存在す  
5 る場合は、名前のつづりが誤っていないか確認してください。パッケージ名は  
5 すべて小文字である必要があります。

5 **DBI1001I**

5 使用法:

```
5 db2icrt [-a AuthType]
5 [-p PortName]
5 [-s InstType]
5 [-w WordWidth]
5 -u FencedID InstName
```

5 説明: **db2icrt** コマンドに無効な引き数が入力されました。このコマンドで使用でき  
5 る引き数は、以下のとおりです。

- 5 -hl-? 使用法を表示します。
- 5 -d デバッグ・モードを有効にします。
- 5 -a インスタンスの認証タイプ (SERVER、CLIENT、または  
5 SERVER\_ENCRYPT) は AuthType です。
- 5 -p インスタンスが使用するポート名またはポート番号は PortName  
5 です。
- 5 -s 作成するインスタンスのタイプ (wse、ese、または client) は  
5 InstType です。
- 5 -u Fenced UDF と Fenced ストアード・プロシージャを実行するユ  
5 ーザーの名前は FencedID です。 DB2 クライアントのみがインス  
5 トールされている場合、このフラグは不要です。
- 5 -w 作成するインスタンスの幅 (31、32、または 64 ビット) は  
5 WordWidth です。適切な幅を選択するには、必要なバージョンの  
5 DB2 (31 ビット、32 ビット、または 64 ビット) がインストール  
5 されている必要があります。幅のデフォルト値は、DB2 の現行バ  
5 ージョン、プラットフォーム、およびインスタンス・タイプがサ  
5 ポートする最小幅 (ビット) です。

5 インスタンスの名前は InstName です。

5 ユーザー応答:

5 このコマンドの詳細については、「概説およびインストール」マニュアルを参  
5 照してください。適切なオプションと引き数を指定して、コマンドを再実行し  
5 てください。

5 **DBI1170E -w フラグは、可能な入力として 31、32、または 64 だけを受け入**  
5 **れます。**

5 **説明:** **db2icrt** コマンドまたは **db2iupdt** コマンドを使用する場合は、オプ  
5 ション・フラグ **-w** に対して 31、32、または 64 のみを指定できま  
5 す。64 ビットのインスタンスを作成する場合は、**db2icrt** に対して  
5 **-w 64** を指定します。31 または 32 ビットのインスタンスを 64 ビ  
5 ットに更新する場合は、**db2iupdt** に対して **-w 64** を指定できます。  
5 これらの場合を除き、**-w** フラグは不要です。更新するビット幅は、  
5 **DB2** の現行バージョン、プラットフォーム、およびインスタンス・タ  
5 イプにサポートされている必要があります。

5 **ユーザー応答:**

5 このコマンドの詳細については、「概説およびインストール」マニユ  
5 アルを参照してください。適切なオプションと引き数を指定して、コ  
5 マンドを再実行してください。

5 **DBI1956E**

5 **使用法:** **db2ilist [-w 31|32|64] [-p] [-a] [inst\_name]**

5 **説明:** **db2ilist** コマンドに不正確な引き数が入力されました。このコマンドで使用で  
5 きる引き数は、以下のとおりです。

5 **-h** 使用法を表示します。  
5 **-w 31|32|64** 31、32、または 64 ビット・インスタンスをリストします。  
5 **-w** オプションは **-p** オプションとともに使用できます。ま  
5 た、**-a** オプションと置き換えることができます。  
5 **-p** インスタンスの実行元である、**DB2** のインストール・パスを  
5 リストします。**-p** オプションは **-a** オプションとともに使用  
5 できます。また、**-a** オプションと置き換えることができま  
5 す。  
5 **-a** インスタンスと関連する **DB2** のインストール・パスや、イン  
5 スタンスのビット幅情報 (32 または 64) を含む関連情報をす  
5 べて戻します。**DB2 on Linux (S/390、zSeries)** の場合、戻さ  
5 れる情報のうち 32 ビットに関するものは 31 ビットに該当し  
5 ます。  
5 **inst\_name** 指定したインスタンスに関する情報を戻します。インスタンス  
5 を指定しない場合、**db2ilist** は **DB2** の現行リリースの全イン  
5 スタンスに関する情報を戻します。

5 **ユーザー応答:**

5 コマンドを次のように再入力してください。

## 移行

### 1 DataJoiner またはレプリケーション使用時の DB2 Universal Database の移行

1 DB2 Universal Database レプリケーション用のキャプチャーまたはアプライ・プログラム  
1 を実行している DataJoiner® または DB2 Universal Database for Linux, UNIX and  
1 Windows のインスタンスを移行する場合は、DB2 Universal Database または  
1 DataJoiner インスタンスを移行する前に、レプリケーション環境の移行の準備を行う必  
1 要があります。必要な準備を行うための詳細な方法は、DB2 DataPropagator™ バージョ  
1 ン 8 の移行に関するドキュメンテーションに記載されています。DB2 DataPropagator  
1 バージョン 8 の移行に関するドキュメンテーションは、  
1 <http://www.ibm.com/software/data/dpropr/> にあります。

### 5 DB2 バージョン 8 の Windows 32 ビットのデータベースと Windows 64 ビ 5 ットの移行

5 Windows オペレーティング・システムで 32 ビット・マシン上でご使用の 32 ビット  
5 DB2 バージョン 8 データベースを 64 ビット・マシン上の 64 ビットのデータベース  
5 に移行するには、以下のようにします。

#### 5 前提条件:

- 5 • ご使用の 64 ビット・マシンに、DB2 バージョン 8 の 64 ビット・バージョンがイ  
5 ンストールされていることが必要です。
- 5 • ご使用の 32 ビット Windows システムで DB2 バージョン 8 が実行されている必要  
5 があります。

#### 5 手順:

5 Windows 64 ビット DB2 バージョン 8 に移行するには、次のようにします。

- 5 1. ご使用の 32 ビット Windows システムで DB2 バージョン 8 データベースのバック  
5 アップを作成する。
- 5 2. DB2 バージョン 8 バックアップ (上記の手順 1 で作成したもの) を 64 ビット  
5 Windows システムにリストアする。

5 **注:** DB2 を 32 ビットから 64 ビットに移行することに加え、次の以降のシナリオも可  
5 能です。

- 5 • Windows のバージョンの移行
- 5 • DB2 UDB のバージョンの移行
- 5 • すべての移行を一度に行う
- 5 • 逆方向に移行して、32 ビットにする



- 5                   • 逆方向に移行して、DB2 UDB バージョン 7 またはバージョン 6 にする
- 5                   詳細な情報が IBM レッド・ブック「Scaling DB2 UDB on Windows Server 2003」
- 5                   に記載されています。このレッド・ブックには、次の URL からアクセスできま
- 5                   す。
- 5                   <http://publib-b.boulder.ibm.com/Redbooks.nsf/RedbookAbstracts/sg247019.html>

---

## Query Patroller

### DYN\_QUERY\_MGMT 無効時の制約事項

5                   データベース構成パラメーター DYN\_QUERY\_MGMT が無効な場合、Query Patroller

5                   は以下のアクションを実行できません。

- 5                   • 保留状態の照会を保留解除する
- 5                   • フォアグラウンド内の実行中またはキューに入れられた照会を、バックグラウンド内
- 5                    で実行する

5                   照会の保留状態を解除する場合、あるいはフォアグラウンド照会をバックグラウンド照

5                   会に変更する場合、DYN\_QUERY\_MGMT が DISABLE に設定されていると、エラー・

5                   メッセージが表示され、照会の状態は変更されません。保留状態の照会が実行予定にな

5                   っており、その実行時に DYN\_QUERY\_MGMT が無効になっていた場合は、エラー・

5                   メッセージが `qpdiaq.log` に書き込まれ、照会は保留状態のままになります。

### 結果表による DB2QPRT スキーマの使用

5                   フィックスパック 5 より、新規結果表はすべて、サブミッターのスキーマではなくスキ

5                   ーマ DB2QPRT で作成されます。

5                   フィックスパック 5 のインストール前に作成されたプロファイルを持ち、以下のいずれ

5                   かを所有するオペレーターに対しては、DB2QPRT スキーマに対する DROPIN 特権が

5                   付与されます。

- 5                   • 編集権限のある MONITORING 特権
- 5                   • 編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権

5                   DB2QPRT スキーマに対する DROPIN 特権は、Query Patroller がこのスキーマに最初

5                   に結果表を作成する際に付与されます。

5                   フィックスパック 5 のインストール後に、編集権限のある MONITORING 特権または

5                   HISTORICAL ANALYSIS 特権を付与されたオペレーターには、プロファイルの作成ま

5                   たは更新時に DB2QPRT スキーマに対する DROPIN 特権も付与されます。

## Historical Data Generator 実行前の Explain 表の作成

Historical Data Generator for Query Patroller の実行時、Explain 表が存在しない場合は、生成プログラムがそれを作成します。ただし、Historical Data Generator の実行前に Explain 表を作成することを強くお勧めします。Explain 表を作成する場合は、いずれも同じパーティションに作成してください。Explain 表を同一パーティションに作成することにより、Explain 機能のパフォーマンスが向上します。これにともない、Historical Data Generator のパフォーマンスも向上します。

## 履歴分析用のログ・ファイルの検査

一定期間の照会アクティビティ（履歴分析）レポートの照会に対する「**Explain Run**」列に、「**異常実行 (Ran unsuccessfully)**」という状況が表示されている場合、履歴データはその照会に対して生成されません。このため、その照会は履歴分析レポートまたはグラフに表示されません。バージョン 8 で言及されているとおり、照会が正常に実行されなかった理由を判別するには、qpuser.log ファイルを確認してください。

ただし、qpuser.log ファイルの他に、qpdiag.log ファイルも確認してください。

---

## レプリケーション

### DB2 データ・レプリケーション用の Java 管理 API ドキュメンテーション

DB2 DataPropagator の管理機能を使用して、アプリケーション開発をしている場合、IBM サポートから、関連する管理 Java API のドキュメンテーションを入手できます。

### 列マッピングの制約事項およびレプリケーション・センター

ターゲット表に対し、IBMSNAP\_SUBS\_MEMBR 表の TARGET\_KEY\_CHG 列が「Y」に設定されている場合、ソース表内の式をターゲット表内のキー列にマップすることはできません。これは、サブスクリプション・セット・メンバーの作成にレプリケーション・センターを使用している場合、ターゲット表のキー列がソース表の式にマップされる場合には、オプション「ターゲット・キー列を更新するために、アプライ・プログラムに変更前イメージ値を使用させる」を選択してはなりません。

### Informix ソースのレプリケーション

Informix ソースのレプリケーションが、タイム・スタンプ値に依存しなくなりました。この機能拡張により、10 月の夏時間調整などで時間を遅らせる際に発生する可能性のある問題を回避できます。

この機能拡張を利用するには、Informix ソースの既存の登録およびサブスクリプションを、以下のように移行する必要があります。

1. Web ブラウザーを開きます。

- 5 2. <http://www.ibm.com/software/data/dpropr/support.html> にある DB2 DataPropagator の  
5 Web ページにアクセスします。
- 5 3. 「**Solve a problem**」を選択し、FAQ、APAR、および技術情報を検索します。
- 5 4. 検索基準を入力し、「**Submit**」をクリックします。

## 5 Update-anywhere シナリオに LOB 列を組み込む際の制限の解除

5 フィックスパック 5 以降、競合検出が無効な場合に限り、LOB 列を Update-anywhere  
5 シナリオ (レプリカ表を含む) に組み込む際の制限が解除されました。

---

## 1 Windows の保護環境

1 Windows システムでの管理者ではないユーザーが Windows 上で DB2 Universal  
1 Database を使用すると、ファイル許可の問題が発生することがあります。  
1 SQL1035N、SQL1652N、または SQL5005C のエラー・メッセージが表示された場合、  
1 考えられる原因と対策は以下のとおりです。

1 ユーザーは、**sqllib** ディレクトリーに対する十分な権限を持っていない:

1 **問題** DB2 CLP またはコマンド・ウィンドウを開こうとすると、SQL1035N または  
1 SQL1652N エラーになる。DB2 Universal Database コード (コア・ファイル)  
1 は書き込み特権が限定されるディレクトリー構造にインストールされますが、  
1 いくつかの DB2 Universal Database ツールでは DB2INSTPROF ディレクトリー  
1 でファイルの書き込みと作成を行う必要があります。

1 **対処法** ユーザーに MODIFY 許可を最低限付与できる新規ディレクトリーを作成し、  
1 **db2set -g db2tempdir** を使用して新規ディレクトリーを指定するか、  
1 Windows システム環境の db2tempdir 変数を設定します。

1 ユーザーが **SYSADM\_GROUP** に属していても **sqllib¥<instance\_dir>** ディレクトリー  
1 へ書き込むための十分な権限がない:

1 **問題** データベース・マネージャー構成ファイルの更新を試みると (update dbm  
1 cfg)、SQL5005C システム・エラーになる。ユーザーを **SYSADM\_GROUP** に  
1 追加しても、そのユーザーには **sqllib¥instance\_dir** ディレクトリーに書き込む  
1 ために必要な NTFS アクセス権はありません。

1 **最初の対策**

1 ユーザーにファイル・システム・レベルで **instance\_dir** ディレクトリーの少な  
1 くとも MODIFY 許可を付与します。

1 **2 番目の対策**

1 ユーザーに MODIFY 許可を最低限付与できる新規ディレクトリーを作成しま  
1 す。 **db2set db2instprof** を使用して、新規ディレクトリーを指定します。  
1 **db2instprof** で指定した新規インスタンス・ディレクトリーに情報が保管される

1 ようインスタンスを再作成するか、古いインスタンス・ディレクトリーを新規  
1 ディレクトリーに移動する必要があります。

---

## Spatial Extender

### 5 フィックスバックまたはパッチのインストール後の再バインド

5 地理情報操作用に設定された既存のデータベースがある場合は、DB2 フィックスバック  
5 またはパッチのインストール後に、リスト・ファイル `db2gse.lst` を再バインドする必要  
5 があります。 `db2gse.lst` ファイルには、DB2 Spatial Extender が提供するストアード・  
5 プロシージャ用バインド・ファイルの名前が含まれます。

#### 5 前提条件:

5 `db2gse.lst` ファイルをバインドするには、以下のいずれかの権限が必要です。

- 5 • `sysadm` または `dbadm` 権限
- 5 • スキーマに対する `ALTERIN` 特権
- 5 • パッケージに対する `BIND` 特権

#### 5 手順:

5 `db2gse.lst` ファイルを再バインドするには、以下を実行します。

- 5 1. バインド・ファイルがあるインスタンス・ディレクトリーに移動します。
  - 5 a. Windows の場合は、DB2 コマンド・ウィンドウを開き、次のコマンドを入力し  
5 ます。

```
5 cd %DB2PATH%\bnd
```

- 5 b. UNIX の場合は、次のコマンドを入力します。

```
5 cd $HOME/sql1lib/bnd
```

5 ここで、`$HOME` はインスタンス所有者のホーム・ディレクトリーです。

- 5 2. データベースに接続し、`BIND` コマンドを実行します。例えば、次のように入力しま  
5 す。

```
5 db2 connect to dbname
5 db2 bind /home/instance/sql1lib/bnd/@db2gse.lst
5 db2 terminate
```

5 `BIND` コマンドの代わりに `ALL` オプションを指定した `DB2RBIND` コマンドを使用す  
5 ることもできます。 `BIND` コマンドおよび `DB2RBIND` コマンドの構文およびオプショ  
5 ンについては、「DB2 コマンド・リファレンス」を参照してください。

---

## SQL アシスト

### コマンド・センターの無効な SQL アシスト・ボタン

コマンド・センターでは、接続が確立した時のみ SQL アシスト・ボタンが使用可能になります。

### DB2 から起動される 2 つのバージョンの SQL アシスト

DB2 Universal Database バージョン 8.1 では、バージョン 7 とバージョン 8 の両方の SQL アシストを呼び出すことができます。バージョン 7 は DB2 データウェアハウス・センターから起動できます。その他のすべてのセンターは、最新のバージョン 8 を起動します。製品のオンライン・ヘルプには、SQL アシスト・バージョン 7 についての追加情報があります。

---

## SQL リファレンス

### 5 ALTER WRAPPER ステートメント

5 ラッパーは変更できません。ALTER WRAPPER ステートメントはサポートされていま  
5 せん。

---

## システム・モニター

### 3 イベント・レコード・サイズの制限

3 デッドロック・イベント・モニターおよび詳細なグローバル・デッドロック・イベン  
3 ト・モニターの場合、イベント・レコードは、構成不能な内部バッファのサイズによ  
3 って制限されます。 db2diag.log が、レコード・サイズ制限によりログ・エントリーを  
3 書き込めない場合、ログに「event record is larger than BUFFERSIZE」などのメッセー  
3 ジが記録されます。

### 3 スナップショット UDF の制限

3 スナップショット・ユーザー定義関数 (UDF) は、LIST DB DIRECTORY コマンドが  
3 発行された場合に、**Directory entry type** の値が「Indirect」または「Home」であるデ  
3 ータベース上で使用されるようになっていました。UDF がリモート・データベースに対  
3 して使用された場合、UDF は失敗し、次のエラーが表示されます。

3 SQL1427N インスタンス・アタッチメントが存在しません。

4 V8.1 で導入されたスナップショット UDF は、モニター・スイッチ・コマンドおよび  
4 API、またはモニター・リセット・コマンドおよび API と共に使用することはできませ  
4 せん。この制限には、以下のものが含まれます。

4 • GET MONITOR SWITCHES

- UPDATE MONITOR SWITCHES
- RESET MONITOR

この制限の理由は、そのようなコマンドでは INSTANCE ATTACH を使用するのに対して、スナップショット UDF では DATABASE CONNECT を使用するためです。

## V8.1.4 で定義されていないリカバリー・モニター・エレメントで再実行されるログの量

Information Center for V8.1.4 のリリース情報のセクションでは、新しいモニター・エレメントとして `log_to_redo_for_recovery` が紹介されています。このモニター・エレメントの値は、V8.1.4 では未定義です。この機能は、今後のリリースで計画されます。

---

## 2 スロットル・ユーティリティーの制約事項

複数のスロットル・ユーティリティーの同時実行はサポートされていません。例えば、以下のような制約があります。

- 3 件のオンライン・バックアップを実行する場合、1 件のみスロットルできます。残りの 2 件には、優先順位 0 を付ける必要があります。
- 再バランスとバックアップを同時に呼び出すことができますが、再バランスまたはバックアップのいずれかに優先順位 0 を設定する必要があります。

複数のスロットル・ユーティリティーを同時に呼び出すと、ユーティリティーが異常に長時間実行される原因になることがあります。また、影響ポリシー (UTIL\_IMPACT\_LIM) で設定された限度よりも重大な影響をシステムに与える原因になることもあります。

---

## XML Extender

### XML Extender の名前変更されたサンプル・プログラム

その他のインストール済みプログラムと XML Extender が競合すると、一部の XML Extender サンプル・プログラムによってファイルが深刻な損傷を受ける場合があります。以下のリストは、XML Extender サンプル・プログラムと、比較的競合の可能性が少ない、新しい置換用のプログラムのリストです。必ず、古いサンプル・プログラムではなく、新しいプログラムを使用してください。

表 5. XML Extender 用のサンプル・プログラムの置換 (Windows)

| 古いプログラム (使用しない) | 新しいプログラム (使用する) |
|-----------------|-----------------|
| insertx.exe     | dxxisrt.exe     |
| retrieve.exe    | dxxretr.exe     |
| retrieve2.exe   | dxxretr2.exe    |
| retrievec.exe   | dxxretrc.exe    |

表 5. XML Extender 用のサンプル・プログラムの置換 (Windows) (続き)

| 古いプログラム (使用しない) | 新しいプログラム (使用する) |
|-----------------|-----------------|
| shred.exe       | dxxshrd.exe     |
| tests2x.exe     | dxxgenx.exe     |
| tests2xb.exe    | dxxgenxb.exe    |
| tests2xc.exe    | dxxgenxc.exe    |

表 6. XML Extender 用のサンプル・プログラムの置換 (UNIX)

| 古いプログラム (使用しない) | 新しいプログラム (使用する) |
|-----------------|-----------------|
| insertx         | dxxisrt         |
| retrieve        | dxxretr         |
| retrieve2       | dxxretr2        |
| retrievec       | dxxretrc        |
| shred           | dxxshrd         |
| tests2x         | dxxgenx         |
| tests2xb        | dxxgenxb        |
| tests2xc        | dxxgenxc        |

### サンプル sqx ファイルと連携した新規サンプル・プログラムの使用

上記の実行可能ファイルのソース・コード (.sqx ファイル) は、ご使用のシステムの samples¥db2xml¥c ディレクトリーにあります。ソース・ファイルには、古い名前が付けられたままになっています。ソース・コードに変更を加える場合、(古い名前の) 新しくコンパイルした実行可能ファイルを、 sqllib¥bin ディレクトリーにコピーします。Windows プラットフォームでは、別のコピーを作成し、上記の新しい名前で名前変更し、それを bin ディレクトリーにコピーする必要があります。両方のコピーが、bin ディレクトリーの既存のファイルから置き換わります。例えば、新しいバージョンの shred.exe をコンパイルしたら、2 つのコピーを作成し、bin ディレクトリーのファイルを置き換えます。1 つは shred.exe で、もう 1 つは dxxshrd.exe に名前変更します。UNIX プラットフォームでは、古い名前のファイルを、新しくコンパイルしたバージョンに置き換えるだけで構いません。そのようなサンプルから新規の実行可能ファイルを作成する場合、¥SQLLIB¥samples¥db2xml¥c¥ ディレクトリーから ¥SQLLIB¥bin¥ ディレクトリーに新規のファイルをコピーし、前記の表に従って名前を変更して追加コピーを作成します。

## 非固有属性およびエレメント名を含む XML Extender 内の文書の分解

DXXQ045E エラーを受け取ることなく、(同じ表か別の表の) 別の列にマッピングされている、非固有属性または非固有エレメント名 (またはその両方) を含む文書を分解できるようにしました。次に示すのは、非固有属性および非固有エレメント名を含む XML 文書の一例です。

```
<Order ID="0001-6789">
 <!-- Note: attribute name ID is non-unique -->
 <Customer ID = "1111">
 <Name>John Smith</Name>
 </Customer>
 <!-- Note: element name Name is non_unique -->
 <Salesperson ID = "1234">
 <Name>Jane Doe</Name>
 </Salesperson>
 <OrderDetail>
 <ItemNo>xxxx-xxxx</ItemNo>
 <Quantity>2</Quantity>
 <UnitPrice>12.50</UnitPrice>
 </OrderDetail>
 <OrderDetail>
 <ItemNo>yyyy-yyyy</ItemNo>
 <Quantity>4</Quantity>
 <UnitPrice>24.99</UnitPrice>
 </OrderDetail>
</Order>
```

重複しているエレメント/属性を別の列にマッピングする付属 DAD は、次のようになります。

```
<element_node name="Order">
 <RDB_node>
 <table name="order_tab" key="order_id"/>
 <table name="detail_tab"/>
 <condition>
 order_tab.order_id = detail_tab.order_id
 </condition>
 </RDB_node>

 <!--attribute ID duplicated below, but mapped to a different col-->
 <attribute_node name="ID">
 <RDB_node>
 <table name="order_tab" />
 <column name="order_id" type="char(9)"/>
 </RDB_node>
 </attribute_node>

 <element_node name="Customer">
 <!--attribute ID duplicated above, but mapped to a different col-->
 <attribute_node name="ID">
 <RDB_node>
 <table name="order_tab" />
 <column name="cust_id" type="integer"/>
 </RDB_node>
 </attribute_node>
 </element_node>
</element_node>
```



```

4 </attribute_node>
4
4 <!--element name duplicated below, but mapped to a different col-->
4 <element_node name="Name">
4 <text_node>
4 <RDB_node>
4 <table name="order_tab" />
4 <column name="cust_name" type="char(20)" />
4 </RDB_node>
4 </text_node>
4 </element_node>
4 </element_node>
4
4 <element_node name="Salesperson">
4 <!--attribute ID duplicated above, but mapped to a different col-->
4 <attribute_node name="ID">
4 <RDB_node>
4 <RDB_node>
4 <table name="order_tab" />
4 <column name="salesp_id" type="integer"/>
4 </RDB_node>
4 </attribute_node>
4
4 <!--element name duplicated above, but mapped to a different col-->
4 <element_node name="Name">
4 <text_node>
4 <RDB_node>
4 <table name="order_tab" />
4 <column name="salesp_name" type="char(20)" />
4 </RDB_node>
4 </text_node>
4 </element_node>
4 </element_node>
4
4 <element_node name="OrderDetail" multi_occurrence="YES">
4 <element_node name="ItemNo">
4 <text_node>
4 <RDB_node>
4 <table name="detail_tab" />
4 <column name="itemno" type="char(9)"/>
4 </RDB_node>
4 </text_node>
4 </element_node>
4 <element_node name="Quantity">
4 <text_node>
4 <RDB_node>
4 <table name="detail_tab" />
4 <column name="quantity" type="integer"/>
4 </RDB_node>
4 </text_node>
4 </element_node>
4 <element_node name="UnitPrice">
4 <text_node>
4 <RDB_node>detail_tab" />
4 <table name="detail_tab" />

```

```
4 <column name="unit_price" type="decimal(7,2)"/>
4 </RDB_node>
4 </text_node>
4 </element_node>
4 </element_node>
4 </element_node>
```

4 上記の文書を分解した後の表の内容は、次のようになります。

4 ORDER\_TAB:

ORDER_ID	CUST_ID	CUST_NAME	SALESP_ID	SALESP_NAME
0001-6789	1111	John Smith	1234	Jane Doe

4 DETAIL\_TAB:

ORDER_ID	ITEMNO	QUANTITY	UNIT_PRICE
0001-6789	xxxx-xxxx	2	12.50
0001-6789	yyyy-yyyy	4	24.99

5 注: 複数のエレメントまたは属性を同一表の同一列にマップするには、表の別名を定義  
5 し、その別名をマッピングの 1 つの DAD <table> エレメントで使用します。

---

## 4 追加情報

### Unicode サーバー動作の変更

バージョン 7 では、Unicode サーバーは接続時にアプリケーションによって GRAPHIC コード・ページを無視し、UCS2 Unicode (コード・ページ 1200) が使用されました。バージョン 8 Unicode サーバーでは、クライアントによって送信されたコード・ページを使用します。

### SQLException.getMessage() 使用時に全メッセージ・テキストが戻されない

デフォルトでは、DB2BaseDataSource.retrieveMessagesFromServerOnGetMessage プロパティは使用不可になっています。このプロパティを使用可能にすると、標準の JDBC SQLException.getMessage() への呼び出しはすべて、サーバー側のストアード・プロシージャを呼び出し、読み取り可能なメッセージ・テキストにエラーがないか検索します。デフォルトでは、サーバー・サイドのエラーが発生したときに全メッセージ・テキストがクライアントに戻されるわけではありません。

プロプラエタリー・メソッド DB2Sqlca.getMessage() を使用すれば、完全にフォーマットされたメッセージ・テキストを検索できます。SQLException.getMessage() メソッドの呼び出しによって作業単位が開始されるのは、retrieveMessagesFromServerOnGetMessage が使用可能になっている場合のみです。DB2Sqlca.getMessage() メソッドへ呼び出しを実行すると、ストアード・プロシージャが呼び出され、作業単位が開始されます。フィックスバック 1 より前では、DB2Sqlca.getMessage() メソッドを使用すると例外がスローされることがあります。

## Linux、UNIX および Windows オペレーティング・システムでの Java 関数 およびルーチン

JVM における制約事項により、Java ルーチンが NOT FENCED と定義されていても、FENCED THREADSAFE と定義されたものとして起動されます。バージョン 8.1 では、NOT FENCED と指定された Java ルーチンはすべて、FENCED ルーチンとして扱われます。UDF の引き数定義の LOB ロケーターを含む、パラメーター・スタイル DB2GENERAL で定義された Java UDF は、機能しません。ロケーターではなく、BLOB か CLOB 引き数を使用するよう、それらの関数を変更する必要があります。Java UDF では、LOB ロケーターは、DB2JAVA パラメーター・スタイルが指定されるときの入力引き数としてのみサポートされています。

## 翻訳版の MDAC ファイルが最初にインストールされていない場合に DB2 Universal Database V8.1 のすべての各国語版で使用される英語の Microsoft Data Access Components (MDAC) ファイル

各国語版の DB2 をインストールする前に、各国語版の MDAC 2.7 をインストールしていない場合、DB2 Universal Database は英語の MDAC ファイルをデフォルトでインストールします。これによって、オペレーティング・システムが英語版でなくても、「Windows ODBC Data Source Administrator」パネルが英語で表示されることとなります。この問題を修正する「MDAC 2.7 RTM - Refresh」バンドルを、Microsoft の Web サイト [http://www.microsoft.com/data/download\\_270RTM.htm](http://www.microsoft.com/data/download_270RTM.htm) からインストールできます。インストールする言語を選択し、必要な実行プログラムをダウンロードして実行します。これは翻訳版の ODBC Data Source Administrator ファイルをインストールするものです。



---

## オンライン・ヘルプの修正および更新

---

### デベロップメント・センターにおける SQL ストアード・プロシージャの C 環境の構成

サーバー上の DB2® for Windows® で作業を行っており、Visual C++ コンパイラーを使用している場合は、SQL ビルド設定を構成する必要があります。SQL ビルド・オプションを構成するまで、SQL ストアード・プロシージャをビルドできません。

デベロップメント・センターの「データベース接続プロパティ」ノートブックを使用して、SQL ビルド設定を構成します。

SQL ストアード・プロシージャ用に C コンパイラー環境を構成するには、以下のようになります。

1. ノートブックの SQL ビルド設定ページで、SQL オブジェクトのビルドに使用するコンパイラー環境を指定します。
  - 「リフレッシュ」をクリックします。
  - 「コンパイラー環境」フィールドで、Windows サーバー上の VC98¥BIN¥VCVARS32.BAT ファイルのロケーションを入力します。
2. 「OK」をクリックし、ノートブックをクローズして変更を保管します。「適用」をクリックすると、変更は保管され、プロパティの変更を継続できます。

---

### 2 Hummingbird Exceed を使ったデベロップメント・センターへのアクセス時のビュー一連結の使用可能化

Hummingbird® Exceed を使用して UNIX® 上のデベロップメント・センターにアクセスする場合に、デベロップメント・センター内のタイトル・バーのドラッグによってビューの移動と連結を実行可能にするには、先に XTEST 拡張機能バージョン 2.2 を使用可能にしておく必要があります。

XTEST 拡張機能を使用可能にするには、次のようにします。

1. 「スタート」メニューで「プログラム」->「Hummingbird Connectivity 7.0」->「Exceed」->「XConfig」を選択します。「XConfig」ウィンドウが開きます。
2. パスワードの必要な構成の場合、XConfig パスワードを入力します (オプション)。
2. 「プロトコル」アイコンをダブルクリックします。「プロトコル」ウィンドウが開きます。
2. 「X 規格合致試験の互換性 (X Conformance Test Compatibility)」チェック・ボックスをチェックします。

- 2 5. 「プロトコル」ウィンドウ内の「**拡張機能... (Extensions...)**」ボタンをクリックし
- 2 ます。「プロトコル拡張機能 (Protocol Extensions)」ウィンドウが開きます。
- 2 6. 「拡張機能の使用可能化 (Enable Extensions)」リストで、「**XTEST(X11R6)**」チェッ
- 2 ク・ボックスを選択します。
- 2 7. 「**OK**」をクリックします。

---

## 2 デベロップメント・センターのヘルプにおける Microsoft Visual Studio .NET アド

### 2 インの情報の更新

2 ヘルプ・トピック『デベロップメント・センターについて』には、開発環境アドインの

2 リスト内の新規の Microsoft® Visual Studio .NET アドインに関する情報が記載されてい

2 ません。ここでは、Microsoft Visual Studio .NET 開発環境においてデベロップメント・

2 センター機能をサポートする .NET アドインについて説明します。

#### 2 Microsoft Visual Studio .NET 開発環境用の DB2 Development Add-In:

2 DB2 Application Development Client の新コンポーネントに、.NET フレームワーク・バ

2ージョン 1.0 の Microsoft Visual Studio .NET 用 IBM® DB2 Development Add-In があ

2 ります。このアドインは Visual Studio .NET の IDE を拡張して、DB2 .NET Managed

2 Provider ならびに DB2 サーバー側開発サポートを用いる、密接に統合された DB2 ア

2 プリケーション開発サポートを実現します。Microsoft Visual Studio .NET で利用できる

2 このアドインを使用して、以下を実行できます。

- 2 • 拡張スクリプト生成ウィザードを使用して新規の IBM プロジェクト・フォルダーか
- 2 ら DB2 固有のデータベース・プロジェクトを開発する。
- 2 • 新規の IBM Explorer 内で DB2 データ接続を使用して DB2 カタログ情報を探索す
- 2 る。
- 2 • DB2 表/ビュー列およびプロシージャ/関数パラメーター用に拡張されたインテリジ
- 2 ェンス・フィーチャーを利用する。
- 2 • ドラッグ・アンド・ドロップを使用するウィンドウ・フォーム用の ADO.NET コード
- 2 を生成する。
- 2 • プロパティのカスタム・エディターとウィザードを使用して DB2 Managed
- 2 Provider オブジェクトを構成する。
- 2 • さまざまな DB2 開発センターおよび管理センターを起動する。
- 2 • 既存の動的ヘルプ・ウィンドウからアドインのヘルプを表示する。

2 Microsoft Visual Studio .NET データベース接続用の DB2 Development Add-In は、DB2

2 .NET Managed Provider と ADO.NET を使用して管理します。

---

## 2 バージョン 8.1.2 への DB2 XML Extender の移行

2 バージョン 7 のフィックスパックから移行する場合、バージョン 8.1.2 へのアップグレードにどのような変更内容が関与するかを確認するには、バージョン 7 のフィックスパックの各リリース情報を参照してください。新規のフィックスパックにはいずれも、それ以前のフィックスパックの更新がすべて含まれています。

2 旧バージョンからバージョン 8.1.2 に DB2 XML Extender を移行するには、次のステップを実行します。

2 1. DB2 コマンド行から、次のように入力します。

```
2 db2 connect to database_name
2 db2 bind dxxinstall%@dxxMigv.1st
```

2 *dxxinstall* は、DB2 Universal Database のインストール先のディレクトリー・パスです。

2 2. DB2 コマンド行から、次のように入力します。

```
2 dxxMigv database_name
```

---

## Java ルーチンをデベロップメント・センターでコンパイル可能にするパスの設定

デベロップメント・センターは、デベロッパー・キットのバージョンをインストールするロケーションが不明な場合、Java™ ルーチンをコンパイルできません。デフォルトのロケーションは、デベロップメント・センターが最初に開始されたときに、`$HOME/IBM/DB2DC/DB2DC.settings` ファイルに書き込まれます。これらを `$USER.settings` ファイルにコピーし、Unicode エディターで変更するか、あるいはデフォルト・ロケーションにあるデベロッパー・キットのディレクトリーへのシンボリック・リンクを作成できます。

---

## Runstats ダイアログ - 更新された到達情報

Runstats ノートブックを開くには、以下のようにします。

1. コントロール・センターで、表フォルダーに達するまでオブジェクト・ツリーを展開します。
2. 表フォルダーをクリックします。存在する表が、内容ペインに表示されます。
3. 統計を実行する表をすべて右マウス・ボタン・クリックし、ポップアップ・メニューから「統計の実行」を選択します。Runstats ノートブックが開きます。

---

## デベロップメント・センターにおける Java ストアード・プロシージャのビルド・オプションの指定

ストアード・プロシージャ・プロパティ・ノートブックを使用して、Java ストアード・プロシージャのビルド時に使用されるコンパイル・オプションを指定します。

このステップは、ストアード・プロシージャ・プロパティの変更に関するタスクの一部です。

ストアード・プロシージャのビルド・オプションを指定するには、以下のようにします。

1. ストアード・プロシージャ・プロパティ・ノートブックの「ビルド (Build)」ページで、ストアード・プロシージャのビルドのコンパイル・オプションを指定します。使用可能なオプションに関する情報は、コンパイラーのドキュメンテーションを参照してください。
  - a. 「プリコンパイル・オプション」フィールドに、ストアード・プロシージャのビルド時に使用する DB2 Universal Database™ プリコンパイラー・オプションを入力します。パッケージ名は、7 文字以下でなければなりません。
  - b. 「コンパイル・オプション」フィールドに、ストアード・プロシージャのビルド時に使用するコンパイラー・オプションを入力します。
2. 「OK」をクリックし、ノートブックをクローズして変更を保管します。「適用」をクリックすると、変更は保管され、プロパティの変更を継続できます。



---

## 付録 A. CD-ROM のディレクトリー構造

### Windows オペレーティング・システム

フィックスパック CD-ROM 内のファイルは以下の場所にあります。

DB2 製品ファイル	x:\db2
インストール情報	x:\doc\<language>\install.txt
インストール情報 (HTML)	x:\doc\<language>\install.htm
ライセンス・ファイ ル	x:\db2\license
リリース情報	x:\doc\<language>\release.txt
リリース情報 (HTML)	x:\doc\<language>\db2ir\index.htm

### UNIX オペレーティング・システム

フィックスパック CD-ROM 内のファイルは以下の場所にあります。

DB2 製品ファイル	/cdrom/db2
インストール情報	/cdrom/doc/<language>/install.txt
インストール情報 (HTML)	/cdrom/doc/<language>/install.htm
ライセンス・ファイ ル	/cdrom/db2/license
リリース情報	/cdrom/doc/<language>/release.txt
リリース情報 (HTML)	/cdrom/doc/<language>/db2ir/index.htm

ここで、

- x は、ご使用の CD-ROM ドライブを表します (Windows)。
- /cdrom は、ご使用のマウント・ポイントを表します (UNIX)。
- <language> は、言語ディレクトリーを表します。以下の 5 文字のコードです。

ar_AA	アラビア語
bg_BG	ブルガリア語
cs_CZ	チェコ語

da_DK	デンマーク語
de_DE	ドイツ語
el_GR	ギリシャ語
en_US	英語
es_ES	スペイン語
fi_FI	フィンランド語
fr_FR	フランス語
hr_HR	クロアチア語
hu_HU	ハンガリー語
it_IT	イタリア語
iw_IL	Hebrew
ja_JP	日本語
ko_KR	韓国語
nl_NL	オランダ語
no_NO	ノルウェー語
pl_PL	ポーランド語
pt_BR	ブラジル・ポルトガル語
pt_PT	ポルトガル語
ro_RO	ルーマニア語
ru_RU	ロシア語
sk_SK	スロバキア語
sl_SI	スロベニア語
sv_SE	スウェーデン語
tr_TR	トルコ語
zh_CN	中国語 (簡体字)
zh_TW	中国語 (繁体字)

**注:**

1. ディレクトリー名は大文字の場合または小文字の場合があります。それはオペレーティング・システムによって異なります。
2. すべての言語ディレクトリーがすべての CD-ROM で利用できるとは限りませんので、上記にリストされているディレクトリーすべてがこの CD-ROM 上に表示されるわけではありません。

---

## 付録 B. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面に下記宛先にお送りください。

〒106-0032  
東京都港区六本木 3-2-31  
IBM World Trade Asia Corporation  
Licensing

**以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。** IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited  
Office of the Lab Director  
8200 Warden Avenue  
Markham, Ontario  
L6G 1C7  
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他のオペレーティング環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります。単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームの

アプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年), このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. \_年を入れる\_. All rights reserved.

---

## 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	LAN Distance
AISPO	MVS
AIX	MVS/ESA
AIXwindows	MVS/XA
AnyNet	Net.Data
APPN	NetView
AS/400	OS/390
BookManager	OS/400
C Set++	PowerPC
C/370	pSeries
CICS	QBIC
Database 2	QMF
DataHub	RACF
DataJoiner	RISC System/6000
DataPropagator	RS/6000
DataRefresher	S/370
DB2	SP
DB2 Connect	SQL/400
DB2 Extenders	SQL/DS
DB2 OLAP Server	System/370
DB2 Universal Database	System/390
Distributed Relational Database Architecture	SystemView
DRDA	Tivoli
eServer	VisualAge
Extended Services	VM/ESA
FFST	VSE/ESA
First Failure Support Technology	VTAM
IBM	WebExplorer
IMS	WebSphere
IMS/ESA	WIN-OS/2
iSeries	z/OS
	zSeries

以下は、他社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Action Media、LANDesk、MMX、Pentium および ProShare は Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。









Printed in Japan

**日本アイ・ビー・エム株式会社**

〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12